

名城大学FD活動報告書

Meijo Faculty Development activity report

平成27年度

名城大学

FD委員会

目 次

1. はじめに

- 平成27年度のFD活動を振り返って…………… 1
FD 委員会委員長 野口 光宣

2. 平成27年度FD活動一覧

(第17回FDフォーラム、FD学習会、平成27年度授業改善アンケート、名城大学教育年報、FD活動報告書、教育功労賞表彰、学外セミナー・研究集会等への派遣) …… 3

3. 平成27年度FD委員会

- 委員構成…………… 9
- 活動記録…………… 11

4. 平成27年度各学部・研究科等におけるFD取組を推進する組織の活動報告 …… 15

- 法学部・法学研究科
- 経営学部・経営学研究科
- 経済学部・経済学研究科
- 理工学部・理工学研究科
- 農学部・農学研究科
- 薬学部・薬学研究科
- 都市情報学部・都市情報学研究科
- 人間学部・人間学研究科
- 総合学術研究科
- 法務研究科
- 大学・学校づくり研究科
- 教職センター

5. トピックス

- 第17回FDフォーラム実施報告
 - ・第17回FDフォーラム実施報告…………… 55
 - ・所属別参加状況…………… 56
 - ・参加者アンケート集計結果…………… 57
 - ・当日配布資料…………… 67
- 教育功労賞表彰報告
 - ・表彰者一覧…………… 86
 - ・表彰内容…………… 88
- FD学習会実施報告（第1回・第2回） …… 94

6. 資料

- FD委員会要項…………… 97
- 平成27年度所属別FD活動参加状況…………… 99

7. おわりに

- あ と が き —平成27年度FD委員会における活動— …… 101
FD 委員会副委員長 安藤 喜代美

1. はじめに

平成27年度のFD活動を振り返って

FD委員会委員長

野 口 光 宣

今年度、新しい体制でFD活動を開始するにあたり、本学におけるFD活動の定義と進め方について改めて確認した。それによると、本学のFD活動は、授業・教授法の開発（ミクロ・レベル）、カリキュラム・プログラムの開発（ミドル・レベル）、組織の教育環境・教育制度の開発（マクロ・レベル）という三つのレベルを持ち、各学部・研究科等により主体的に推進されるべきものとされている。また、全学FD委員会の役割は、授業アンケート、FDフォーラム、教育功労賞、教育年報発刊等の企画を通して、各学部・研究科等のFD活動をサポートすること、および、各学部・研究科等のFD活動の共有を促すことを基本としている。

上記のような考えに沿ったFD活動を具体化するために、今年度は以下のような改善策を講じた。

①FD委員会の運営効率化を図るため、事前に本委員会の議題整理や企画案立案を行うための組織としてFD企画準備委員会を設置した。

②FD活動の全学的一体性を可視化するため、最大公約数的な課題を二つ抽出し、FD活動報告書に共通課題として記載した。

③授業改善アンケートWGを立ち上げ、アンケート項目を全面的に見直した。また、紙媒体からウェブ方式への転換、全科目実施、各学期複数回実施などの検討も行った。

④今年度の重点目標として、学修行動調査の有効性の検証を掲げた。FD委員が交代で、関連する資料についてのプレゼンテーションを行い、ディスカッションの後、コメントをまとめた。

今年度のFDフォーラムは、学修行動調査をテーマとして実施された。お茶の水女子大学の半田智久教授を基調講演の講師として招いた。学内事例報告としては、理工学部による「WEBを用いた理工学教育・学生指導等支援システムの構築（報告者：理工学部・社会基盤デザイン工学科 新井 宗之 准教授）」と、薬学部による「アウトカム基盤型教育の実現をサポートするIR実践のための基盤システムの構築（報告者：薬学部・薬学科 大津 史子 教授）」が紹介された。

第一回FD学習会は、静岡大学の益川 弘如 准教授を講師として招き、アクティブ・ラーニング・ワークショップを題材に、第二回FD学習会は、京都大学の山田 剛史 准教授を講師として招き、学修成果の可視化を題材に実施した。

次年度も、今年度同様、課題解決を積み重ねながら、各学部・研究科等主体のFD活動という本学特有のFD活動を着実に推進していくことが、FD委員会の責務だと考える。

2. 平成27年度 FD 活動一覧

平成27年度 FD 活動スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
FD委員会	★ 第1回FD委員会	★ 第2回FD委員会	★ 第3回FD委員会	★ 第4回FD委員会		★ 第5回FD委員会	★ 第6回FD委員会	★ 第7回FD委員会	★ 第8回FD委員会	★ 第9回FD委員会	★ 第10回FD委員会	★ 第11回FD委員会
FD企画準備委員会		★ 第1回FD企画準備委員会	★ 第2回FD企画準備委員会	★ 第3回FD企画準備委員会		★ 第4回FD企画準備委員会	★ 第5回FD企画準備委員会	★ 第6回FD企画準備委員会				
授業改善アンケート			授業改善アンケート実施	授業改善アンケート実施	アンケート結果 フィードバック				授業改善アンケート実施	アンケート結果 フィードバック		アンケート調査 結果報告書発刊
教育年報								★ 第1回教育年報編集委員会		★ 第2回教育年報編集委員会		★ 教育年報発刊
授業アンケートWG		★ 第1回	★ 第2回	★ 第3回				★ 第4回	★ 第5回			
FDフォーラム・学習会							★ 第17回FDフォーラム		★ 第1回学習会			★ 第2回学習会
学修の行動調査						★ 第1回	★ 第2回	★ 第3回	★ 第4回	★ 第5回	★ 第6回	★ 第7回
教育功労賞									教育功労賞候補者募集	審査		★ 教育功労賞表彰

平成27年度 FD 活動一覧

1. 第17回 FD フォーラム

日 時：平成27年10月28日（水） 13：30～16：30

テ ー マ：教育の内部質保証～その基盤づくりと実際～

参加者数：105名

プログラム

基調講演 「双軸の教学 IR 調査がひらく教育の内部質保証」

（お茶の水女子大学 教育開発センター 教授 半田 智久 氏）

学内取組報告

《理工学部》

WEB を用いた理工学教育・学生指導等支援システムの構築

（報告者：理工学部・社会基盤デザイン工学科 新井 宗之 准教授）

《薬学部》

アウトカム基盤型教育の実現をサポートする IR 実践のための基盤システムの構築

（報告者：薬学部・薬学科 大津 史子 教授）

2. 第1回 FD 学習会

日 時：平成27年12月18日（金） 13：00～15：00

テ ー マ：アクティブ・ラーニング講演会

参加者数：32名

講 師：静岡大学 学術院教育学領域 准教授 益川 弘如 氏

3. 第2回 FD 学習会

日 時：平成28年3月14日（月） 13：00～15：00

テ ー マ：学修成果の可視化について

参加者数：50名

講 師：京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授 山田 剛史 氏

4. 平成27年度前・後期授業改善アンケート

・実施期間：前期…平成27年6月26日～平成27年7月22日

後期…平成27年12月14日～平成28年1月13日

・対象科目

学部の授業を担当する専任教員および非常勤講師を対象とし、平成27年度前・後期にアンケートを実施した講義科目において実施した。（ただし、体育科目、オムニバス形式の科目、実験・実習・演習科目、履修者数が10名未満の科目は除く）

実施科目数は前期675科目（学生回答数：延べ 49,505件）

後期679科目（学生回答数：延べ 43,868件）

• 概 要

学生の授業に対する意見を把握し、改善点・要望事項を把握するとともに、調査結果を今後の授業改善の一助とするために実施した。

集計結果は教員個人にフィードバックし、授業改善に必要な情報として活用している。また、学部単位におけるFD活動を推進することを旨に、強みと弱みを明確にした分析結果を報告書として取り纏め、全教員に配布し、授業改善の素材として活用している。

5. 名城大学教育年報第10号発刊

• 発刊日：平成28年3月

• 発行部数：750部

• 概 要

本学における教育活動の研究・実践活動を共有・蓄積し、広く教育の質の向上に資することを目的として、教育実践報告及び教育功労賞受賞者による特別寄稿、平成27年度からはFDフォーラム講演者による特別寄稿を依頼した。

全教員および各部局に配布し、他大学にも送付した。

教育年報の種別・内容等は次のとおりである。

	教育実践報告	特別寄稿
定 義	教育実践を対象とした取り組みで、本学および他の大学の学部・研究科・センター・部署の参考になるような報告	・教育功労賞受賞者による特別寄稿 ・FDフォーラム講演者による特別寄稿
投稿資格	名城大学の教職員（教員・事務職員）。本大学の教育に携わる他大学等の教育職員（非常勤講師）の投稿も可。	

第10号では、教育実践報告については内容の確認を経て、2報告を掲載。教育功労賞受賞者による特別寄稿4件及びFDフォーラム講演者による特別寄稿1件を掲載した。

6. 平成27年度FD活動報告書発刊

• 発刊日：平成28年3月

• 発行部数：750部

• 概 要

平成27年度の本学におけるFD活動をまとめたもので、FD委員会の活動報告や第17回FDフォーラムの報告を掲載した。全教員および各部局に配布し、他大学にも送付した。

7. 教育功労賞表彰

• 概 要

FD委員会では、職員の教育改善に対する意識を高め、組織の活性化を図り、本学の教育

の質の向上に資することを目的とし、各学部および研究科等において、教育活動および教育改善に大きく貢献した専任教員またはグループ（事務職員を含む）に教育功労賞を授与することとしている。今年度は、計3件の申請があり、FD委員会による審査の結果、いずれも相応しい内容であることから、表彰すると共に本報告書に活動内容を記載し、周知を図ることとした。

また、特に全学へ波及させるべき取組として、経営学部から推薦された森川 章 教授の取組を特別教育功労賞として表彰することとした。

平成27年度教育功労賞取組一覧

No.	候補者等名	所属学部等	単独・グループ	推薦対象となった活動・テーマ
1	森川 章	経営学部	単独	経営学部の教育改善を可能とした先駆的貢献
2	柳沢 きわむ 究	理工学部	単独	建築学科におけるアクティブラーニングの積極的導入による教育の質向上
3	くう 葛 はんびん 漢彬	理工学研究科	単独	大学院の教育活動および教育改善における貢献

8. 学外セミナー・研究集会等への派遣

【大学教育開発センターの予算執行分のみ掲載】

No.	開催日時	主催機関	企画名称	派遣人数
1	平成27年 5 月29日	株式会社教育ソフトウェア	大学 FD 学修会2015	1 名
2	6 月13日	全国私立大学 FD 連携 フォーラム	2015年度パネルディスカッションへの参加	2 名
3	6 月22日	株式会社ディスコ	第 5 回 C-Learning セミナー	1 名
4	6 月26日	創価大学	2015年度第 2 回学士課程教育機構 FD セミナー 「学生の適応をどう支援するか ～成績不振、精神的 悩み、発達障害などを抱える学生の理解と対応～」	1 名
5	7 月 3 日	大学行政管理学会	シンポジウム 「大学のガバナンス改革と職員の役割」	1 名
6	7 月 3 日	株式会社朝日ネット	第16回 manaba セミナー	1 名
7	7 月11日	創価大学	創価大学 第13回 FD フォーラム 「高大接続・入試改革で日本の教育は変わるのか？」	1 名
8	7 月25日	公益財団法人 大学コンソーシアム京都	教育 IR フォーラム 変革する大学！ 「学修成果の可視化」から教育・授業を変える ー感覚的な議論から、エビデンスに基づいた改革 の実践へー	1 名
9	8 月25日～28日	SPOD (四国地区大学教職員能力 開発ネットワーク)	SPOD フォーラム 2015	1 名
10	10月 3 日	関西大学	第14回 関西大学 FD フォーラム	1 名
11	10月 5 日		MS-26「能動的学修促進プロジェクト」に関わる 訪問調査（玉川大学）	1 名
12	10月 9 日		MS-26「能動的学修促進プロジェクト」に関わる 訪問調査（山口大学）	2 名
13	10月24日	大学 IR コンソーシアム	大学 IR コンソーシアムセミナー ー大学 IR の現在と IR の活用についてー	1 名
14	10月30日	株式会社朝日ネット	第17回 manaba セミナー	1 名
15	12月21日	全国私立大学 FD 連携 フォーラム	2015年度ミーティング、懇談会への参加	3 名
16	平成28年 2 月22日	玉川大学・大阪府立大学・ 長崎大学	AP 合同フォーラム「共通の学生調査を用いた学修 成果の可視化への取組」	1 名
17	3 月 5 日～ 6 日	公益財団法人 大学コンソーシアム京都	大学コンソーシアム京都 FD フォーラム 「大学教育を再考する ～イマドキから見えるカタチ～」	1 名
18	3 月12日～13日	日本大学 FD 推進センター	学生 FD サミット2016春	2 名

3. 平成27年度 FD 委員会

平成27年度 FD 委員会委員

所属等	職 名	氏 名
副学長		野口 光宣 ※委員長
大学教育開発センター	副委員長・教授	安藤 喜代美 ※副委員長
学務センター	センター長	山岸 健三
法学部	教授	榎本 雅記
経営学部	准教授	相川 奈美
経済学部	准教授	伊藤 健司
理工学部	准教授	亀谷 由隆
農学部	教授	津呂 正人
薬学部	教授	大津 史子
都市情報学部	教授	酒井 順哉
人間学部	教授	岡戸 浩子
総合学術研究科	准教授	景山 伯春
法務研究科	教授	村田 裕
大学・学校づくり研究科	准教授	小出 禎子
教職センター	教授	酒井 博世
大学教育開発センター	事務部長	大武 貞光
学務センター	事務部長	大脇 肇
キャリアセンター	事務部長	上村 克義

平成27年度 FD 委員会 取組分担

【授業アンケート WG（7名）】

所 属 等	職 名	氏 名	備 考
副学長	委員長	野口 光宣	座長
大学教育開発センター	副委員長・センター長	安藤 喜代美	
学務センター	センター長	山岸 健三	
経済学部	准教授	伊藤 健司	
理工学部	准教授	亀谷 由隆	
薬学部	教授	大津 史子	
大学教育開発センター	事務部長	大武 貞光	

【学修行動調査研究（6名）】

所 属 等	職 名	氏 名	備 考
副学長	委員長	野口 光宣	
法学部	教授	榎本 雅記	
経営学部	准教授	相川 奈美	
農学部	教授	津呂 正人	
都市情報学部	教授	酒井 順哉	
人間学部	教授	岡戸 浩子	

【教育年報編集委員会（4名）】

所 属 等	職 名	氏 名	備 考
総合学術研究科	准教授	景山 伯春	委員長
法務研究科	教授	村田 裕	
大学・学校づくり研究科	准教授	小出 禎子	
教職センター	教授	酒井 博世	

【FD 企画準備委員会（5名）】

所 属 等	職 名	氏 名	備 考
副学長	委員長	野口 光宣	委員長
大学教育開発センター	副委員長・センター長	安藤 喜代美	
経済学部	准教授	伊藤 健司	
薬学部	教授	大津 史子	
大学教育開発センター	事務部長	大武 貞光	

平成27年度 FD 委員会活動記録

第1回 平成27年4月17日（金）

【審議事項】

1. 平成27年度開催日程について
2. 今期 FD 委員会について
 - （1）前 FD 委員会からの申し送りについて
 - （2）準備委員会の設置について
 - （3）平成27年度活動予定スケジュールについて
3. 授業改善アンケートの今後について

【報告事項】

1. 平成27年度地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）について
2. 平成27年度大学教育再生加速プログラムについて
3. 各種フォーラムの案内について

第2回 平成27年5月22日（金）

【審議事項】

1. 全学 FD 委員会の基本方針・活動内容について
2. 各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織の課題設定について
3. 平成28年度以降の授業改善アンケートについて
4. 平成27年度 FD フォーラム及び学習会テーマについて

【報告事項】

1. 各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織の更新について
2. 全国私立大学 FD 連携フォーラムについて
3. 各種フォーラムの案内について

第3回 平成27年6月19日（金）

【審議事項】

1. 平成27年度 FD フォーラム及び学習会テーマについて（継続）
2. 平成27年度教育年報の募集について
3. FD 委員会の運営について

【報告事項】

1. 平成27年度前期授業改善アンケート実施について
2. 平成27年度私立大学等改革総合支援事業について
3. 各種フォーラムの案内について

第4回 平成27年7月17日（金）

【審議事項】

1. 第17回 FD フォーラム企画について
2. 「学修行動調査」実施に向けた研究及び「教育年報編集委員会」の分担について
3. FD 企画協力に係る謝金について

【報告事項】

1. 平成28年度以降の授業改善アンケートについて
2. 平成27年度教育年報の募集について
3. 平成27年度前期授業改善アンケート実施期間における土曜・祝日の対応について
4. 平成27年度私立大学等改革総合支援事業（タイプ1）調査の中間報告について
5. 各種フォーラムの案内について

第5回 平成27年9月25日（金）

【議題】

1. 平成27年度前期授業改善アンケート実施報告について
2. 平成27年度私立大学等改革総合支援事業の調査結果について
3. 各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織の活動の中間報告について
4. 第17回 FD フォーラム企画の一部修正について

【学修行動調査の研究】

第1回：学修行動調査が重要視されるようになった背景の確認と学修行動調査とは何かの
解明

第6回 平成27年10月16日（金）

【議題】

1. 平成27年度後期授業改善アンケートの実施について
2. 第1回 FD 学習会（アクティブ・ラーニング講演会）の開催について
3. 第17回 FD フォーラムの周知について
4. 各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織の活動について
5. 第14回関西大学 FD フォーラム・大学教育学会課題研究『学士課程教育における共通教育の質保証』合同企画イベント出張報告について

【学修行動調査の研究】

第2回：学生の学修行動に関する間接評価 一名古屋女子大学の取組事例―

第7回 平成27年11月20日（金）

【議題】

1. 学修行動調査の試行について
2. 平成27年度教育功労賞候補者の推薦依頼について

3. 平成28年度新任教員研修の企画について
4. 平成27年度第1回FD学習会の開催について
5. 平成27年度FDフォーラム実施報告について
6. 平成27年度教育年報の応募状況について
7. 平成27年度私立大学等改革総合支援事業の審査結果について
8. 全国私立大学FD連携フォーラムについて

【学修行動調査の研究】

第3回：浦和大学学生の学修状況について ―浦和大学の取組事例―

第8回 平成27年12月18日（金）

【学修行動調査の研究】

第4回：大学IRコンソーシアムの学生調査について ―大学IRコンソーシアムの取組事例―

【報告事項】

1. 学修行動調査研究の今後のスケジュール等について
2. 平成28年度予算要求について
3. 2015年度大学コンソーシアム京都FDフォーラムの開催について

第9回 平成28年1月15日（金）

【学修行動調査の研究】

第5回：IRネットワーク連携事業による学修行動調査の取組 ―お茶の水女子大学の取組事例―

【審議事項】

1. 授業改善アンケートWGの中間報告について
2. 学修行動調査と学務センター学生アンケートの共同実施について
3. 平成27年度第2回FD学習会企画について ―学修行動調査研究のまとめとして―
4. 平成27年度FD活動報告書の発刊について

【報告事項】

1. 第1回FD学習会報告について
2. 授業改善アンケート科目の選定基準について
3. 平成27年度教育功労賞審査について
4. 大学評価結果について

【その他】

1. 薬学部FDフォーラム（MS-26戦略プラン推進事業 ディープアクティブラーニング導入サポートプロジェクト）の開催周知について

第10回 平成28年 2月19日（金）

【学修行動調査の研究】

第 6 回：第50回学生生活実態調査の概要報告 全国大学生生活協同組合連合会

【審議事項】

1. 授業アンケート Web システムについて
2. 平成27年度教育功労賞審査について

【報告事項】

1. 平成27年度教育年報の構成について
2. 大学評価結果について

第11回 平成28年 3月14日（月）

【審議事項】

1. 平成28年度授業アンケートの Web 実施について
2. 今期学修行動調査の研究の総括について

【報告事項】

1. 平成27年度教育功労賞表彰結果について
2. 平成27年度 FD 活動報告書の配布について

【その他】

1. 平成28年度 FD 委員会開催日程について

4. 平成27年度
各学部・研究科等における
FD 取組を推進する組織の活動報告

各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織一覧

学部	推進組織名	推進組織構成メンバー
法学部	FD 部会	FD 委員 1 名、教務委員 3 名、入試委員 1 名、学生委員 1 名
法学研究科	FD 部会	修士課程部会構成員全員
経営学部	GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会	経営学部長、経営学部協議員、キャリア委員、教務委員、FD 委員、担当委員
経営学研究科	教育制度改革委員会	経営学部長、経営学部協議員、経営学科長、国際経営学科長、主任教授、FD 委員、教務委員、
経済学部	経済学部 FD 委員会	経済学部長、経済学科長、教務委員、経済学科委員、産業社会学科長、産業社会学科委員、FD 委員
経済学研究科	経済学研究科 FD 委員会	研究科長、主任教授、研究科委員
理工学部 理工学研究科	教育改善委員会	委員長（学部長指名）、学科委員（11名）、教養教育委員（1名）、物理教室委員（1名）、理工学部教務委員長、理工学部 JABEE 推進委員長、大学教育開発センター委員会委員（理工学部 1 名）、FD 委員会委員（理工学部 1 名）、総合数理教育センター長、理工学部事務長、理工学部事務職員（2 名）、必要に応じて委員長が指名する委員（若干名）
農学部 農学研究科	農学部 FD 委員会	農学部 FD 委員を中心とする農学部関係教職員（生物資源学科、応用生物化学科、生物環境科学科の各学科会議および農場教員会議を分科会と位置づける）
薬学部	薬学部 FD 委員会	FD 委員長 大津史子 協議員、教務委員長、学生委員長、就職委員長、国試・CBT 対策委員長、教務係事務職員 1 名
薬学研究科	大学院薬学研究科 FD 委員会	薬学研究科主任教授、FD 委員 2 名、大学院担当事務職員 1 名。委員長は薬学研究科主任教授を充てる。
都市情報学部 都市情報学研究科	都市情報学部授業研究会	FD 委員長（学部長指名：酒井順哉）、大学院学務委員長（亀井栄治）、教務委員長（手嶋正章）、入試委員（島田康人） 教務係事務職員 1 名、担当事務職員 1 名
人間学部	人間学部 FD 委員会	FD 委員 2 名、学務委員長、入試委員長、就職委員長、教務事務職員 1 名
人間学研究科	人間学研究科 FD 委員会	FD 委員 2 名、主任教授、研究科長、教務事務職員 1 名
総合学術研究科	総合学術研究科教育検討部会	◎田中義人 教授 ○伊藤康児 教授 高倍昭洋 教授 原田健一 教授 志村ゆず 准教授 景山伯春 准教授
法務研究科	法務研究科 FD 委員会	委員会は、研究科委員会で選出された委員で組織する。
大学・学校づくり研究科	FD 推進委員会	浦田広朗（研究科長）、木岡一明、小出禎子
教職センター	教職センター会議 （教職センターの教授会） ※教職センターの構成員全体で推進するため、特別な組織は設けなくて、既存の会議体を利用する。	教職センター 教員 酒井博世、野々山清、片山信吾、曾山和彦、竹内英人、平山勉、谷口正明

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 法学部 ）
推進組織名（ FD 部会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

前期では、アクティブラーニング型学修や、語学研修等の多様な学修経験の実践例を中心に、FD 部会を通じて集約した。実践例として、裁判傍聴（事前・事後学修を含む）、社会福祉法人からの特別講師講義、外国大学からの特別講師講義、元最高裁判事の特別講義などが報告された。

前年度から継続した活動としては、平成28年度より実施される新カリキュラムの教育内容、教育方法の在り方についての検討のうち、とりわけ初年度教育に重点をおいた検討がすすめられた。具体的には、「法学入門」「基礎演習Ⅰ」（一年次前期配置科目）の学修内容についての議論となった。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

多様な学修経験について、後期は、前期に引き続き実践例の集約をするとともに、実践の成果、課題等についての議論の場を設け、来年度以降の実践につなげていく予定である。

新カリキュラムの検討について、後期は初年度教育の学習内容のさらに詰めた検討および、専門科目等他のカリキュラムとの関係等に関する検討を行う予定である。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 6 月11日	多様な学修経験の実践例の報告など
2	平成27年 7 月 9 日	初年度教育の検討など

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 法学研究科 ）
推進組織名（ FD 部会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

平成27年度のFD部会においては、前年度に引き続き、修士論文提出者それぞれの指導教員によって、修士論文作成に当たっての指導方針、指導するに当たっての注意点、今後へ向けた提言等が報告された。

全体会合は、平成28年2月25日に開催された。これは修士論文審査結果の報告の機会に開催されるのが最も適切であるとの考慮からである。もっとも、教員個別の情報共有等は、様々な機会を使って、年間を通じて行われているところである。とりわけ本年度は、7月9日に担当学生との教育指導について、教員間の情報共有のための機会を設けた。

今年度は、論文執筆に当たっての資料やデータの適正な取り扱いについて、どのように指導すべきなのかといった点を中心に討議がなされた。特に、適切な引用方法の指導、およびその引用が適正かどうかの判断方法が重要な論点となった。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

来年度以降も、これまでの方針、すなわち論文執筆にむけた指導の充実が中心課題となる。さらなる教員間の情報共有および意見交換をすすめていきたい。今年度修了者中には、昨年度に問題となったような留学生や経済的困難者がいなかったため、それらに対する対策についてはあまり問題とならなかったが、今後そのような学生が出てくることも予測されるため、昨年度報告で、今年度の課題とした点も引き続き、継続的に検討していきたい。

3. 活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年7月9日	論文執筆者指導に関する情報共有
2	平成28年2月25日	修士論文の指導について

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 経営学部 ）
推進組織名（ GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

活動目標・・・学部教育改善・充実を図る。

具体的に、入学から卒業までの学生の成長状況をチェックし、問題の把握・分析・解決に努め、創造的な知性と豊かな人間性を備えた有能な人材の育成をし、魅力ある経営学部の構築を目指す。

活動内容及び実績等については下記活動記録参照。

◎ GP 等教育支援プロジェクト委員・経営学部 FD 委員

学部長、協議員、キャリアセンター委員長、教務委員長、FD 委員長

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

次年度も従来から設置されてきた GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会を、FD を推進する組織と捉え、FD 活動を進める。

日常的な FD 会議として、構成員全体が参加する教授会の前後に教育改善のための議論の場を設定して、経営学部を取り巻く環境分析、これまでの教育改善活動を検討する。

◎ GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会・・・毎月 1 回を目安に開催

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 4 月16日	第 1 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
2	平成27年 5 月14日	試験制度について（教授会）
3	平成27年 5 月21日	第 2 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
4	平成27年 6 月18日	第 3 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
5	平成27年 6 月25日	体系的な教育課程の構築に向けて（教授会）
6	平成27年 7 月23日	体系的な教育課程の構築に向けて（教授会）
7	平成27年 7 月30日	第 4 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
8	平成27年 9 月19日	平成28年度基軸科目「人間と環境」について（教授会）
9	平成27年 9 月24日	第 5 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
10	平成27年10月 8 日	平成28年度基軸科目「人間と環境」について（教授会）
11	平成27年10月22日	平成28年度新規開講科目について（（特）キャリア特論）①（教授会）
12	平成27年10月29日	第 6 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
13	平成27年12月17日	第 7 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
14	平成28年 1 月 7 日	平成28年度新規開講科目について（（特）キャリア特論）②（教授会）
15	平成28年 1 月14日	第 8 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会
16	平成28年 2 月25日	第 9 回 GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会

※日常的な FD 会議以外に教授会で議論したものも含む。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 経営学研究科 ）
推進組織名（ 教育制度改革委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

活動目標・・・研究科の教育改善・充実を図る。

具体的に、入学から修了までの院生の成長状況をチェックし、問題の把握・分析・解決に努め、創造的な知性と豊かな人間性を備えた有能な人材の育成を目指し、魅力ある経営学研究科の改革を目指す。

併せて、学部と大学院との接続プロジェクトを検討する。

活動内容及び実績等については下記活動記録参照。

特に、入試制度の見直しに多くの時間を費やした。

◎教育制度改革委員会メンバー

研究科長、大学院主任教授、大学協議員、経営学科長、国際経営学科長、教務委員長、FD 委員長

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

次年度も従来から設置されてきた教育制度改革委員会を、FD を推進する組織と捉え、FD 活動を進める。

日常的な FD 会議として、構成員全体が参加する研究科委員会の前後に教育改善のための議論の場（構成員：研究科長および主任教授、その他必要に応じて選任）を設定して、経営学研究科を取り巻く環境分析、これまでの教育改善活動やカリキュラム編成等を検討する。

◎教育制度改革委員会・・・前後期各2回を目安に開催

◎日常的な FD 会議・・・必要に応じて研究科委員会の前後で開催

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年4月9日	大学ガバナンスの見直しに伴う研究科委員会要項について
2	平成27年5月14日	平成27年度修士論文テーマ発表会について
3	平成27年6月11日	教職課程認定変更届に対する指摘事項への対応について
4	平成27年7月23日	2016年度特別推薦入学試験（5年修了プログラム対象）について

※教育制度改革委員会、日常的な FD 会議以外に研究科委員会で議論したものも含む。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 経済学部・経済学研究科 ）
推進組織名（ 経済学部・経済学研究科 FD 委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

経済学部・経済学研究科では、平成27年度の FD 活動目標を「各教員が個人的に培ってきた教育に関するノウハウや経験を、学部内の教員（大学院担当教員）全員で共有し、学部（大学院）教育の改善・充実をはかる。特に今年度は、学生の主体的学びの育成について重点的に取り組む。」と設定した。

推進組織として経済学部 FD 委員会と経済学研究科 FD 委員会を組織している。経済学部 FD 委員会の構成メンバーは、学部長、学科長（2名）、学科委員（2名）、教務委員（2名、FD 委員を含む）の7名である。経済学研究科 FD 委員会の構成メンバーは、研究科長、主任教授、研究科委員（3名）の5名である。教職員全体での取り組みを進めるため事務長も参加している。なお、経済学部と経済学研究科の教員はほぼ同じであるため FD 委員会は学部と研究科の合同で活動している。

学生の主体的学びの育成については経済学部として様々な形で取り組んでいる。平成27年度教育の質保証プロジェクトについて、「新規特殊講座「グローバル経済を考える」開設」の取り組みを申請し採択された。学部教員と海外駐在経験者による講義等をベースとして、国際フィールドワークや国際経済関連科目へとつながる導入部分を形成するものである。今年度は海外駐在経験者による講演会などを実施した。平成28年度には新たな特殊講義として「グローバル経済を考える」を開講する。また、「MS-26戦略プラン」の推進に係る事業として、①「専門ゼミをベースとした体験型プログラムを通じて課題解決能力を育成する取り組み」と②「専門ゼミナールの自主的研究をもとにグローバル社会への提言」の2件を学部として申請し採択された。

また後期には、名城大学と名古屋銀行との「人材育成に関わる連携協定」に基づき「営業体験型 PG（講義 & フィールドワーク）」が実施された。

この他、新入生セミナー、デイハイク、大学院生発表会、（専門ゼミナール選択のための）ゼミナールガイダンス、第14回ゼミナール・レポート・フェスティバル、第13回経済学部優秀論文・エッセイ・書評の募集を継続して実施した。新入生セミナーではスムーズなスタートができるように、履修指導、時間割作成指導を重点的におこなっている。ゼミナール・レポート・フェスティバルなどについては、学生のメッセージやコメントを学部ホームページなどに掲載することにより、経済学部での学びの内容の一部が見えるようにするとともに共有を図っている。

フィールドワークや語学研修等の多様な学修経験に関する取り組みは、従来より、「社会フィールドワーク」、「国際フィールドワーク」、専門ゼミナールなどの授業の中でおこなってきている。フィールドワークの授業としては、今年度は「社会フィールドワーク」を「長者町ににぎわいをつくるフィールドワーク」、「産業遺産と産業観光」など4つ、「国際フィールドワーク」を2つ（オランダ、韓国）実施した。平成28年1月には天白キャンパスにて名古屋城の天守閣整備に関する

名古屋市のタウンミーティング（大学生対象版）が開催され、名古屋城観光を考えるための市民アンケートを実施した研究室など経済学部 の 3 研究室が参加した。

テーマを設定してフリーディスカッション方式でおこなう経済学部・経済学研究科 FD 懇談会を 4 回実施した（第 9 回（平成27年度第 4 回）は 3 月24日に予定）。第 6 回（平成27年度第 1 回）は、7 月23日に、「経済学部学位授与方針対応表の検討」をテーマとして実施した。第 7 回（平成27年度第 2 回）は、10月28日に、全学の FD フォーラム終了後、「FD フォーラム「教育の質保証 その基盤づくりと実際」意見交換」として、さらに意見交換をおこなった。第 8 回（平成27年度第 3 回）は、11月19日に「地区懇談会から考える経済学部教育」をテーマとして実施した。第 9 回（平成27年度第 4 回）は、3 月24日に「経済学部の学生の主体的な学びの育成に関する取り組み」をテーマとして実施予定である。前述の「MS-26戦略プラン」の推進に係る事業などの取り組みについて担当者から報告の後、成果や課題、さらなる展開について議論する。またあわせて、大学院修士課程および博士後期課程の論文審査基準の改訂にともない、大学院生に対する論文指導のあり方についても議論の予定である。

この他、経済学部に関連する取り組みとして、経済学部懇談会では、平成27年秋発行の会報の特集で卒業生インタビューを掲載した。在学生からみて比較的年齢に近い卒業生の活躍を知ること、在学生のモチベーション向上につながることを期待している。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

FD 活動の方向性としては、基本的に今年度の取り組み内容を継続して実施していく。各委員会や学部行事の実行委員会・担当者が FD に関連する活動をおこなった際に、FD 懇談会などにおいて意見交換する機会を積極的に設けていきたい。それにより課題や改善が必要な点を学部・研究科として共有することをさらに進めていきたい。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 7 月 9 日	平成27年度の FD 活動目標、活動予定、FD 懇談会の予定
2	平成27年10月 8 日	平成27年度前期の活動報告、後期の活動予定

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 理工学部・理工学研究科 ）
推進組織名（ 教育改善委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

平成27年度は、平成25年4月の2学科新設による学部再編の一環でもある新カリキュラムが施行されて3年目になると同時に、平成29年度からの大学院理工学研究科修士課程の再編のため、応用化学専攻、メカトロニクス工学専攻の新2専攻の設置準備に加え、各専攻のカリキュラムの見直し、学位授与方針、教育編成方針、入学者受け入れ方針などの再検討を実施し、文部科学省に申請する重要な年度であった。本年度は、理工学部・理工学研究科の教育の向上、質保証を活動方針として、理工学部の基礎教育のさらなる充実と大学院へのアドバンスト教育に重きをおいたプログラムの企画と実施を目標とし、本委員会において検討し、実施を試みた。

①学生の主体的な学びに関する取組：

本委員会における教育の質保証プロジェクトとして、「学部・大学院の円滑な接続を目指す実践的なアドバンスト教育の開発および展開」をテーマに、平成29年度からの理工学研究科再編を踏まえ、成績上位層の学部学生の学力・研究力を高め、大学院における高度な研究活動に繋げる企画を本年度検討している。平成28年度からはMS-26戦略プラン事業に教育の質保証プロジェクトが組み込まれることになったため、理工学部・理工学研究科全体としての申請には至らなかったが、本企画をもとに各学科にて更に検討することにより2016年度MS-26戦略プラン「学びのコミュニティ創出支援事業」に企画申請した学科もあった。各学科の企画としては、サマースクール、セミナー、研究所・工場などの現場見学等が挙げられた。これらに能動的・多様な学修経験を行う企画を組み込むことにより、主体的な学びに繋がることが期待される。

②フィールドワーク、語学研修：

MS-26戦略プラン事業に関連する企画として、理工学部では本年度各学科において「実感教育」を実施している。学科によっては最先端のものづくり現場を見学するフィールドワークプログラムを展開している。個々の教員の教育においてフィールドワークを導入している例や、教育現場における実践教育例などもある。このような取り組みを発展させることにより、③における大学院への円滑な接続教育に繋げることもできる。また、本年度も、大学協定校への海外語学研修（夏期31名、春期25名（予定））、学部等の独自海外研修プログラム（5プログラム約40名）に多くの学生が参加し、国際性を高めている。

③学部独自の取り組み：

理工学部のFD活動のみでなく、今後は理工学研究科のFD活動をも新たに実施していくため、その準備として、本年度理工学教育推進フォーラムを「理工学における語学・数理基礎教育から

大学院教育への接続」をテーマに、1) 基礎科目（英語・物理学・化学・数学）の現状と課題、2) 学部専門科目における取り組み例と大学院教育における現状および課題、3) 招待講演：東北大学大学院情報科学研究科における様々な取り組み及び質疑応答・自由討論、と3部構成にて11月に実施した。次年度以降の理工学部・理工学研究科の教育のさらなる充実に向けて、意見交換の場を提供した。

理工学部基礎教育の向上に関しての取り組みは近年充実が図られてきており、本年度も基礎学力が低い学生向けに英語・物理学・化学・数学の基礎演習科目を開講している。数学教育に関しては、新カリキュラム導入時に再試験結果を受けた数学の補履修制度を導入しており、本年度も実施している。また、本委員会では新入生オリエンテーションにおいて、数学基礎知識習熟度自己診断テストを実施し、基礎演習科目の履修を促している。更に数学相談室、物理相談室が開設され、学生からの質問に対応する体制が整えられており、その運営状況は本委員会で報告されている。（数学相談室については、非常勤教員、大学院生、物理相談室については、専任教員、非常勤教員が対応している。）毎年実施されている附属高等学校特別推薦候補者の円滑な学修活動開始を目的とした入学前指導も、1) 模擬講義、2) 全体懇談会、個別懇談会の2部構成にて12月に実施した。加えて MEC プログラム、リメディアル教育への対応も引き続き行っている。特に MEC プログラムに対しては、各種推薦入試合格者に受講を促すために数学と物理学で基礎診断テストを行っている。

理工学部・理工学研究科では、MS-26戦略プラン2015年度事業において教育改善に係る取り組みを多く掲げており、本委員会においても Web を活用した学修システムの構築、上記数学基礎知識習熟度自己診断テストや数学補履修に必要な諸予算を確保している。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

平成28年度には理工学部再編が完成年度を迎え、平成29年度からの理工学研究科修士課程再編に伴い、今後も様々な課題が出てくることを踏まえ、FD 取組組織としての本委員会において、教務委員会、JABEE 推進委員会、各学科との連携を取りながら、FD 活動の課題設定および議論と検討をすすめ対応を図る。

本年度の認証評価の審査結果において、大学院に係る FD 活動の充実が求められていることから、教育改善委員会の業務を拡大し、来年度より理工学研究科独自の教育改善委員会を分割設置する。大学院の FD 活動、教育の質の向上などを検討し、実施していく方向性も理工学研究科委員会において示され、教職員間で共有されている。理工学研究科独自の FD 活動として、まずは研究科独自の FD フォーラムを実施する。関連して、予算を確保すべく2016年度「学びのコミュニティ創出支援事業」に応募をしている。

内容については、「学部から大学院への円滑な接続を目指した教育システム」、「大学院理工学研究科における FD のあり方」、「大学院理工学研究科における横断的教育の可能性」、「大学院理工学研究科博士後期課程の充実に向けての方策」等を予定しており、理工学研究科の構成員がより有意義と感じる取り組みとするためにも、早い時期から企画を立て、実施を試みる。また、隔年で開催している理工学教育推進フォーラムでの問題点や改善点を意識しながら教員と事務職員

が一丸となり取り組みをすすめる。

加えて、理工学部で現在行われている語学・数理基礎教育における様々な企画は引き続き実施するとともに、アクティブラーニング型学修に関して情報共有を行い、新しく企画を立てることも視野に入れ検討する。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 4 月16日	平成27年度委員会の検討事項の確認、教育の質保証プロジェクト申請の検討、初年次数学科目における補履修の登録状況の報告、数学基礎知識習熟度自己診断テストの結果報告他
2	平成27年 5 月28日	基礎演習科目（英語・物理学・化学・数学）等の履修状況の報告、教育の質保証プロジェクトの検討、MS-26 2015年度事業計画の確認他
3	平成27年 7 月 2 日	附属高等学校特別推薦候補者入学前指導の検討、教育の質保証プロジェクトおよび理工学教育推進フォーラムの検討他
4	平成27年 9 月17日	前期統一試験（英語・物理学・数学）結果報告、日本工学教育協会年次大会参加報告、教育の質保証プロジェクトおよび理工学教育推進フォーラムの検討他
5	平成27年10月15日	数学相談室および物理相談室の利用状況報告、理工学教育推進フォーラムの検討、附属高等学校特別推薦候補者入学前指導の検討、統一試験の検討他
6	平成27年11月26日	学習行動調査および教育の質保証プロジェクトの検討他
	平成27年11月26日	理工学教育推進フォーラムの実施
	平成27年12月12日	附属高等学校特別推薦候補者入学前指導の実施
7	平成28年 1 月18日	附属高等学校特別推薦候補者入学前指導の実施報告、理工学教育推進フォーラムの実施報告、物理相談室の利用状況報告、数学基礎知識習熟度自己診断テストの実施、英語統一試験の検討他
	平成28年 1 月20日 ～ 2 月26日	「平成27年度における FD 取組を推進する組織の活動報告」の作成および確認

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 農学部・農学研究科 ）
推進組織名（ 農学部 FD 委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

学部について

農学部は学科・附属組織（農場）ごとに課題を設け取り組んでいるが、共通の課題として学位授与方針、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの来年度からの改訂に向けて慎重に検討を重ね、各ポリシーを最終決定した。その他、各学科で独自に取り組んだ課題は下記の通りで、生物資源学科では事実を正確に伝え、かつ豊かな表現力を育む手法の探索、応用生物化学科では各講義・実験の内容紹介と意見交換を通じた教員間の連携強化と教育効果向上、生物環境科学科では学科の取組みを含む「生物多様性」の意義を広く一般に理解してもらうための教育活動の強化、附属農場では農学に関わる動植物への求知心の創起法の開発を直近の課題としている。

また、MS-26の教育ミッションを勘案し1) 生物資源学科では、体験型プログラムとして正しい農業生産規範（Good Agricultural Practice; GAP）のカリキュラムへの導入、応用生物化学科では2) アクティブラーニング型学修として食品加工実習に生産現場体験を組み込んだ産官コオプ教育プログラムの構築、生物環境科学科では3) アクティブラーニング型学修として学生が「講師」となり小学生を対象に「理科」の自由研究を体験させる教育プログラムの準備に取り組んでいる。また、附属農場では、教育の質保証プログラムとして附属農場の遺伝資源のデータベース化を進めており、データベースのWEB上での公開・発信を始めている。

大学院について

学部同様、学位授与方針や各種ポリシーの改訂に向けて慎重に検討を重ね、各ポリシーを最終決定した。また、次年度始めから農学研究科のFD活動を推進するために、農学研究科のFD委員会を設置することを決定し、その準備を始めた。さらに、学部からの大学院進学者を含む学部4年生全員に対して「大学院に関わる意識調査」アンケートを行い、学生から農学研究科はどのように見られているか、魅力ある大学院とするためにどのような改善を希望しているかなどを調べた。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

今後も学科単位での検討体制は変わらないが、成果の見られるものおよび学部全体として重要と思われる課題については学部での取り組みも視野に入れ、学部FD委員会で積極的に情報交換を行う。

現在、MS-26の教育ミッションについては、上記3課題のうち3)については、本年度8月20日と12月12日に近隣の小学生を対象に科学教室を試行的に開講し、一定の評価を得ており、1)2)については来年度から実行に移すため、1)教務と連携して講義科目の設定並びに課題推進

協力機関との連携打合せ、2) 食品加工実習の内容・構成の検討並びに課題推進協力予定機関との連携調整を進めている。

また、本年度新たに生物資源学科と附属農場より「学生の能動的な学修を促すための実験・農場実習連携授業の実施」、附属農場より「附属農場における学生の主体的学修環境の構築」としたグループワークおよびアクティブ・ラーニングを主体とするプロジェクトを立ち上げ、2016年度「学びのコミュニティ創出支援事業」に応募することとなった。

3. 活動記録 (FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題)

回	日 程	議 題
1	平成27年 4 月23日(木)	第2回 生物資源学科会議・応用生物化学科会議 生資) 生物資源学実験のレポートについて教員共通の客観的評価の導入試案について 応化) 講義・学生実験の内容紹介
2	平成27年 4 月28日(火)	農場教員会議 ・授業満足度アンケート結果に対する意見収集・授業満足度アンケート実施に対する改善点について
3	平成27年 5 月20日(水)	生物環境科学科会議 ・学科主催公開シンポジウムの開催について
4	平成27年 5 月25日(月)	農場教員会議 ・農場実習での授業満足度アンケート実施に対する意見収集
5	平成27年 5 月28日(木)	第3回 応用生物化学科会議・生物環境科学科会議 応化) 講義・学生実験の内容紹介(継続) 生環) 学科主催公開シンポジウムの開催について
6	平成27年 6 月18日(木)	第4回 応用生物化学科会議 ・今年度の学生の基礎学力について
7	平成27年 6 月25日(木)	第5回 応用生物化学科会議 ・講義・学生実験の内容紹介(継続)
8	平成27年 7 月 6 日(月)	農場教員会議 ・農場実習でのテキスト作成に対する意見交換
9	平成27年 7 月 8 日(水)	第8回 生物資源学科会議 ・生物資源学実験レポートの評価基準について
10	平成27年 8 月21日(金)	第7回 応用生物化学科会議 ・各種ポリシーについて
11	平成27年 8 月31日(月)	第10回 生物資源学科会議 ・学位授与方針について
12	平成27年 9 月10日(木)	第8回 応用生物化学科会議 ・各種ポリシーについて
13	平成27年 9 月17日(木)	第9回 応用生物化学科会議 ・講義・学生実験の内容紹介(継続) ・大学院進学に関するアンケートについて

回	日 程	議 題
14	平成27年10月1日(木)	生物資源学科―農場合同会議 ・アクティブラーニング、グループワークを交えた生物資源学実験―農場実習内容の確認 第12回 生物資源学科会議、第10回 応用生物化学科会議、第7回 生物環境科学科会議 ・学科・大学院人材養成目的について 第7回 生物環境科学科会議 ・MS-26事業ノーベル物理学賞受賞記念企画「小学生向け自由研究」の打合せ
15	平成27年10月14日(水)	生物資源学科―アジア GAP 総研、JGAP 協会合同会議 ・生物資源学特別講義3 (MS-26戦略プロジェクト) 内容の打ち合わせ
16	平成27年10月22日(木)	第11回 応用生物化学科会議 ・今後の学科会議における学部FD活動について ・農学研究科の大学院生の文章力について、人材養成目的について 第9回 生物環境科学科会議 ・MS-26事業ノーベル物理学賞受賞記念企画「小学生向け自由研究」の打合せ
17	平成27年10月26日(月)	第13回 生物資源学科会議 ・生物資源学特別講義3 (MS-26戦略プロジェクト) 内容の確認 ・学科・大学院人材養成目的について
18	平成27年11月19日(木)	第14回 生物資源学科会議、第10回 生物環境科学科会議 ・2016年度「学びのコミュニティ創出支援事業(新規)」申請内容の意見交換 ・大学院ディプロマポリシーについて
19	平成27年11月26日(木)	第15回 生物資源学科会議 ・2016年度「学びのコミュニティ創出支援事業(新規)」申請内容の検討 ・大学院の学位授与方針について
20	平成27年12月3日(木)	第13回 応用生物化学科会議 ・大学院の学位授与方針について
21	平成27年12月7日(月)	農場教員会議 ・2016年度「学びのコミュニティ創出支援事業(新規)」への応募について
22	平成27年12月18日(金)	第16回 生物資源学科会議 ・2016年度「学びのコミュニティ創出支援事業(新規)」申請内容の最終確認
23	平成27年12月22日(火)	農場教員会議 ・2016年度「学びのコミュニティ創出支援事業(新規)」への応募について
24	平成28年1月14日(木)	第14回 応用生物化学科会議 ・学部FD活動について ・大学院FD活動について、学位授与方針について
25	平成28年1月18日(月)	第11回 生物環境科学科会議 ・大学院FD活動について、学位授与方針について

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（薬学部）
推進組織名（薬学部 FD 委員会）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

1) FD 委員会活動目標

FD 活動の定義：薬学部の教育理念、目標に到達するために、教職員組織で取り組む教育改善をサポートする。

A. 実質的な授業改善

- ①授業改善アンケートによる学生の学びの問題点の抽出
- ②学びの問題点に対する教育改善方法の検討・提案

B. 学生の主体的な学びの促進

- ①学生フォーラムのサポート
- ②学びの成果の可視化

C. 教育活動の可視化と IR の実施（教育の質保証プロジェクト + MS-26戦略推進プロジェクト）

- ①学生の学びの可視化の手段としての履修系統図ポートフォリオの構築
- ②IR 基盤データベースの構築による IR の実施と教育改善の提案

2) FD 委員会活動内容

A. 実質的な授業改善

- ①授業改善アンケートによる学生の学びの問題点の抽出

目的：

毎年実施している授業改善アンケート結果は、個人にフィードバックされてはいるが、実質の改善がみられない場合もある。学部全体として、授業改善アンケート結果をどのように有効活用し、実質的な授業改善を図るかを検討する。

活動実績：

本年度は、前年度と同様、授業改善アンケートの目的を「学生が知識・技能・態度を身につけ、資質を向上するために、教育側の教育状況及び学生側の受講状況を測定することによって、教育改善の提案を行い、教育の質保証を行う。」とし、授業スキルと学生の自己評価を主体とした授業改善アンケートを実施した。また、授業改善アンケート実施の負担及び結果の IR への活用を考慮して、今年度は授業改善アンケートを履修系統図ポートフォリオで実施した。

成果：

対象科目（前期・後期 述べ科目数）

学年	科目数	ジャンル	科目数
1 年	25	AB	18
2 年	41	基礎	46
3 年	31	衛生	14
4 年	8	医療	25
		F	2

回答率（前期・後期 %）

	前期	後期
1 年	90.5	92.4
2 年	84.7	74.1
3 年	91.7	84.9
4 年	85.7	94.0
合計	88.1	86.4

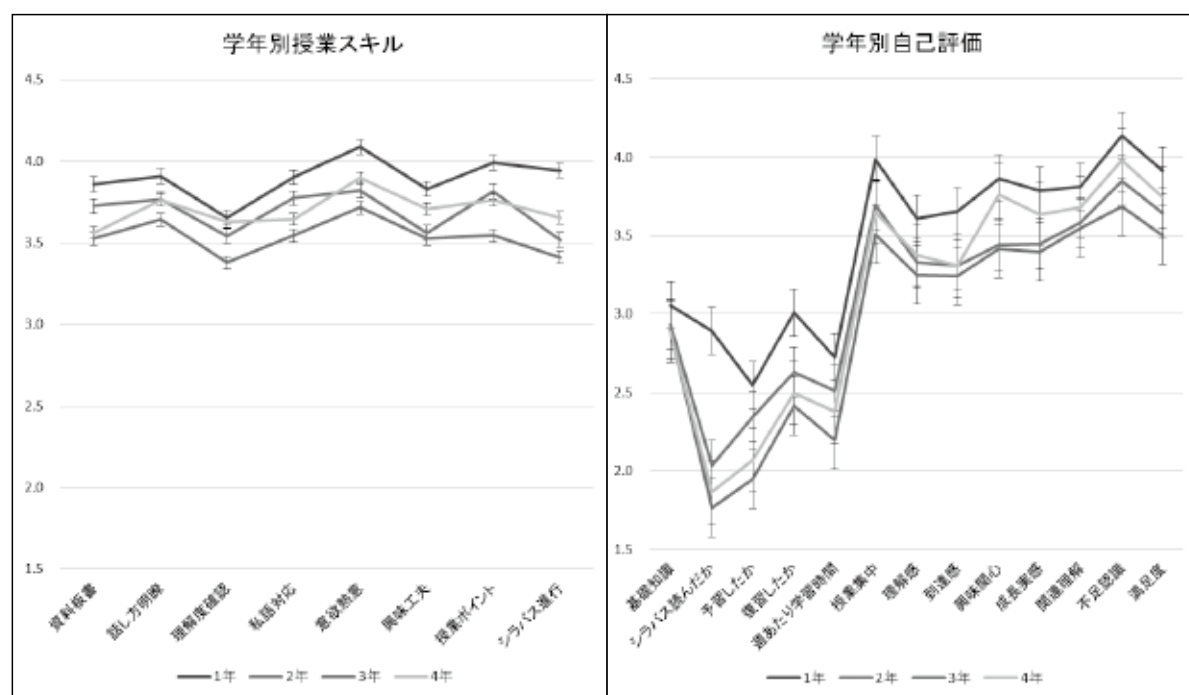
後期において、特に 2 年生での回答率が悪かった。

前期及び後期共に、教員には以下のフィードバックを行った。尚、本結果は、履修系統図ポートフォリオでも閲覧可能とした。

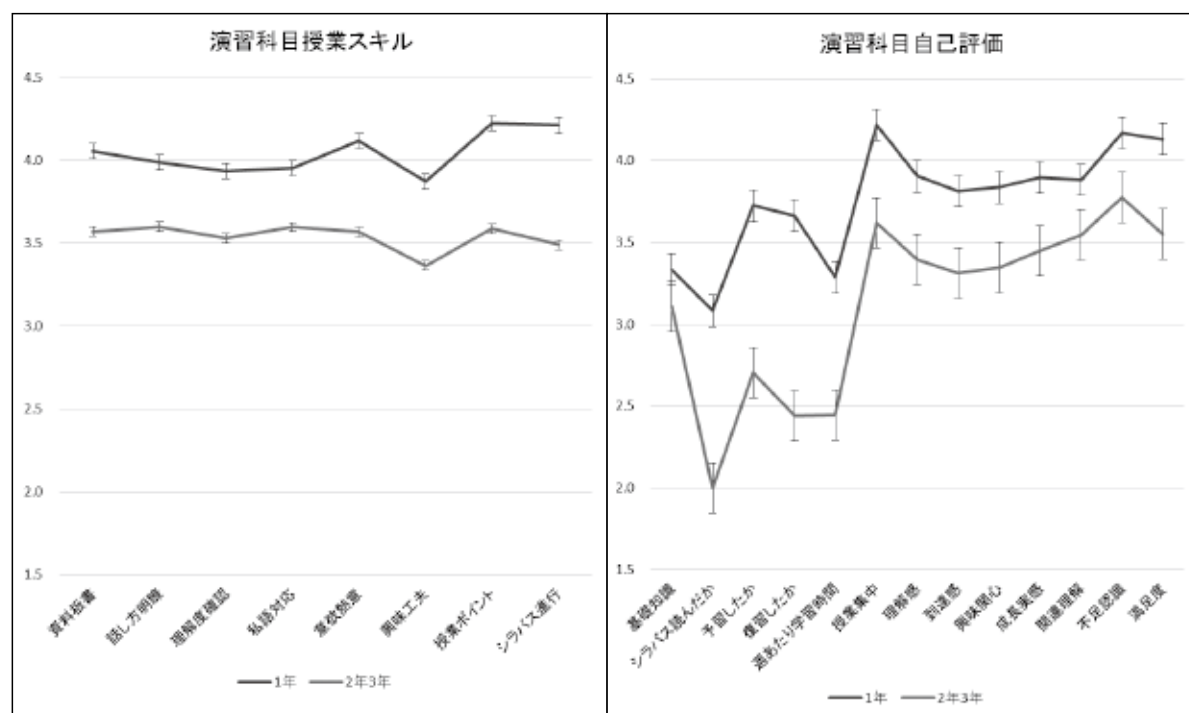
- ①授業アンケート全体像
- ②授業アンケート自由記載
- ③授業アンケート各項目の平均点のレーダーチャート
- ④授業アンケート学生自己評価項目系列グラフ
- ⑤当該科目成績と満足度の関連：上位25%、下位25%、中位の 3 群にわけて、満足度をグラフ化した。
- ⑥当該科目の定期試験の素点と各指標の関連
 - ・基礎知識と成績分布
 - ・勉強時間と成績分布
 - ・授業集中と成績分布
 - ・学生の理解感、目標達成感と成績分布

学生には、③の自己評価部分についてのフィードバックを履修系統図ポートフォリオで行った。また、授業改善アンケートにおいて前後期を合わせ、学年別及びジャンル別、及び演習科目について検討した。

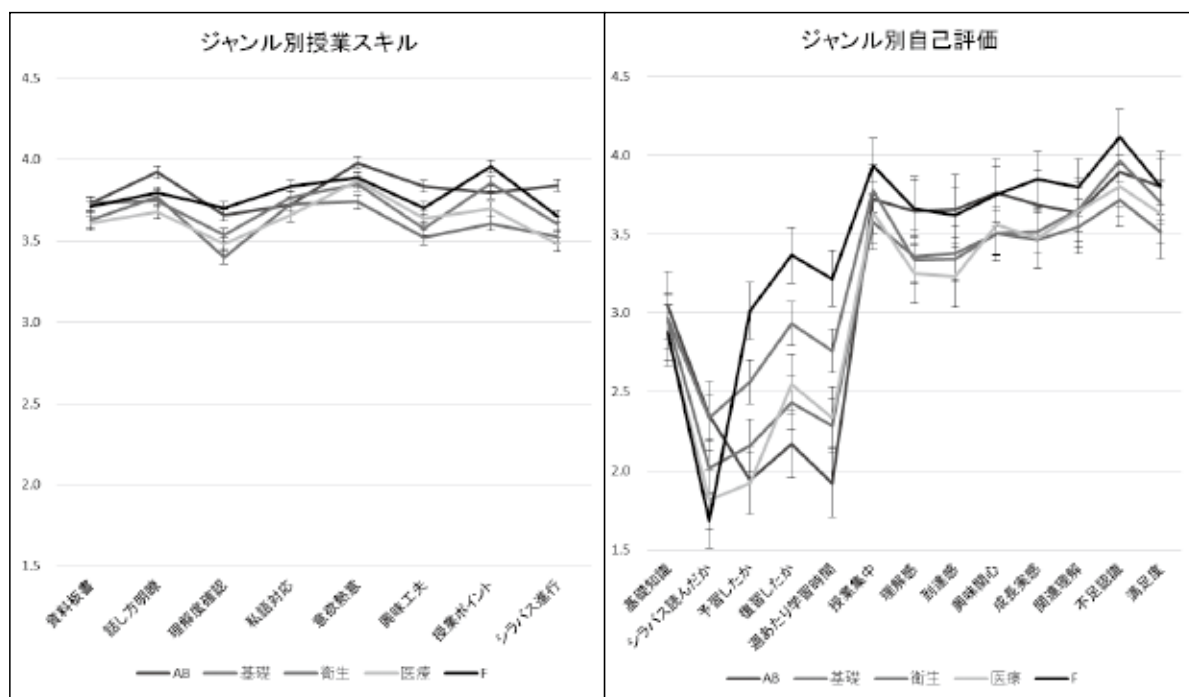
○学年別授業改善アンケート（前後期）



○演習科目授業改善アンケート（前後期）



○ジャンル別授業改善アンケート（前後期）



- ・ 1 年生では、カリキュラム変更による従来の授業スタイルの科目も増えたこともあり、授業スキル及び自己評価において最も高かった。2、3 年生の自己評価項目が全体的に低い傾向であった。
- ・ 演習科目に於いては、1 年生科目の自己評価項目がいずれも他学年より高く、特に、予習や復習などの学習時間の増加が顕著であった。
- ・ ジャンル別においては、一概に比較することは出来ないが、今後、系列別での授業方法や工夫の情報共有などを実施し、授業改善につなげる必要がある。
- ・ 今後、前年度までのデータとの比較を行い、特に 1 年生の新カリキュラムの効果について検証を行う。
- ・ 今後、このようなデータが種々出せる様になったので、IR において種々の検討を行い、授業改善につながる検討を行う予定である。

②学びの問題点に対する教育改善方法の検討・提案

目的：

授業改善に結びつく、カリキュラムデザインを学ぶ機会や研修機会の提案や提供を行う。

本取組は、全学 FD 委員会の課題であるアクティブラーニングの推進を踏まえた取組である。

活動実績：

a. 学びの「深いアプローチと浅いアプローチ」

目的：

薬学部においては、その学習成果の 1 つとして薬剤師国家試験などがある。近年の国家試験においては、症例問題から、知識を統合して考える問題が出題されている。いわゆる「暗記」に頼る学習行動では、このような問題に対応できないと考えられた。そこ

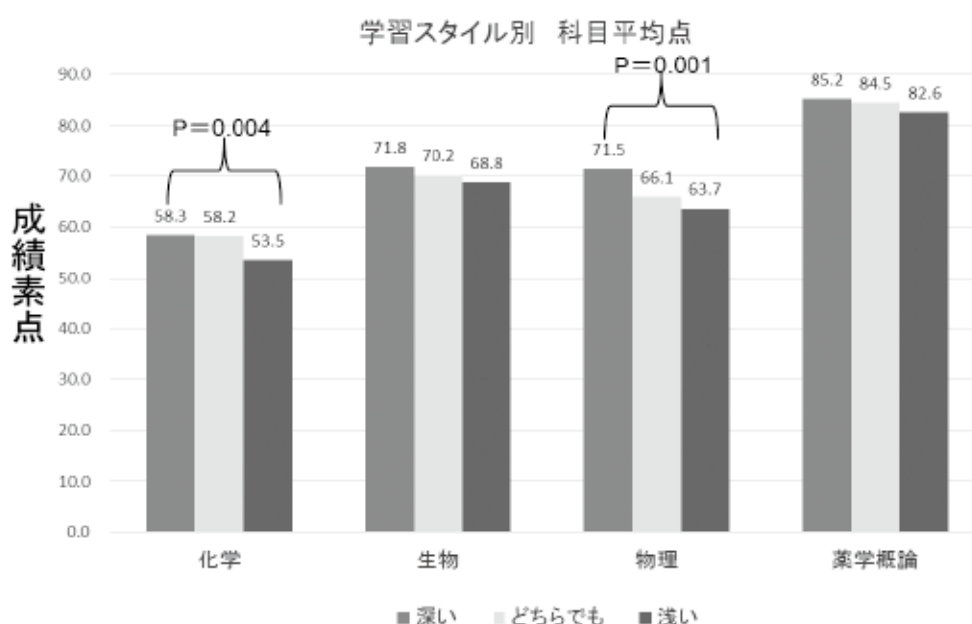
で、IR のトライアルとして「暗記に頼る学生は、本当に学習成果が得られにくいのか？」という RQ をたて検討した。

活動実績：

Biggs らの「深いアプローチと浅いアプローチ」調査を用いた。Biggs らは、この 2 者を識別するための質問群を開発している（R-SPQ-2 F 質問票）。R-SPQ-2 F は、20 問の質問に 5 択（常に当てはまる 5 点、ほとんど当てはまらない 1 点）で答え、深いアプローチ、浅いアプローチに関する質問の合計を算出し、どちらのアプローチかを検討する方法である。これを用い、1 年生の学生を対象として調査を実施した。

成果：

- ・ 1 年生 285 名中、260 名（91%）が調査に答えた。深いアプローチは、118 名（45.4%）、浅いアプローチ 71 名（27.3%）、どちらでもない 71 名（27.3%）であった。
- ・ いずれの科目も、深いアプローチに分類された学生の平均点が最も高く、浅いアプローチに分類された学生の平均点が最も低かった。化学、物理については、深いアプローチの学生は、浅いアプローチの学生に比べ、有意に成績素点が高かった。
- ・ 深いアプローチが、良い学生と等価ではなく、また、浅いアプローチが、悪い学生と等価では決してない。学習スタイルは生得的な面がある一方、授業スタイルや学習状況に依存すると言われている。古典的な講義のみの授業であれば、たとえ、深いアプローチの学習スタイルを持つ学生でも浅いアプローチにならざるを得ない。一方、戦略的な深いアプローチをとらざるを得ないような授業を行えば、浅いアプローチの学習スタイルの学生も深いアプローチをとらざるを得ない。
- ・ 今回の結果は、深いアプローチをとらざるを得ないような授業改善を促進する必要性を示唆したものとする。



b. FD フォーラムの開催

日時：平成28年3月8日 火曜日 13:30-16:40（二部構成、一部だけの参加、二部だけの参加も可）

内容：一部：13:30-15:00 進度を落とさずにアクティブラーニング TBL（チーム基盤型学習）TBL を TBL で学んでいただきます。TBL は、大人数クラスでも導入でき、学習成果の向上が見込めます。教科書や資料を使っていればすぐ導入可能です。

講師：立川 明先生

（高知大学 大学教育創造センター 准教授）

二部：15:10-16:40 TBL の問題を作ってみよう

ご自分のお使いの教科書や資料をご持参下さい。問題作成のコツを伝授します。

講師：立川 明先生

（高知大学 大学教育創造センター 准教授）

c. MS-26推進事業（アクティブラーニング）について

MS-26推進事業（アクティブラーニング）に応募し、アクティブラーニングの1つである TBL のシステム作りとその効果的な「問い」の作成を含めたプロジェクトが採択された。対象とするアクティブラーニングは、TBL チーム基盤型学習であり、その実施を支援するシステム構築を行うと共に、実際に効果を上げている施設見学を行った。また、上記学習会を実施予定である。

施設見学：摂南大学薬学部 1年生 基礎薬学演習 化学 参加者：教員7名

B. 学生の主体的な学びの促進

目的：

学生主体の取り組みのバックアップ体制と個々の学生の学びに対する姿勢へのアプローチを組織的に進めるためのサポートを行う。尚、本取組は、本学 FD 委員会の課題である多様な学習経験に関する取組である。

活動実績：

①学生フォーラムのサポート

今年度の学生フォーラム実行委員会のサポートとして、学生フォーラムのプログラム内容や、講師の選定などについて、アドバイスした。平成28年度は4月23日（土曜日）に「第6回学生フォーラム」の開催を予定している。FD 委員会と実行委員会との懇談も行い、運営に関する助言を行った。また、学生フォーラムの組織作りとしても、複数学年の委員構成ができた。

②学びの成果の可視化

国試対策委員会との協働により、6年生の国家試験対策模擬試験および卒業試験の成績の可視化を行った。

成果：

- ・学生フォーラムの組織作りが昨年度より早くできたことにより、現在のところ、委員それぞれが主体的に動くことが可能となっており、適宜アドバイスを行っていく予定である。
- ・国試対策委員会との協働により、学生の学びを可視化したことで、学生の自己分析、弱点の把握、時間経過と学生個人の努力を可視化することができ、個々の学生指導に効果的であった。

C. 教育活動の可視化と IR の実施（教育の質保証プロジェクト+ MS-26戦略推進プロジェクト）

目的：

新モデルコアカリキュラムに準拠したアウトカム基盤型教育を実施するためのカリキュラム改訂作業の中で、学生の学びに継続性がなく、履修系統図を活かした各授業科目のつながりの確認や学習内容の振り返りが行われていないことが明らかとなった。また、授業アンケートの結果などを実質的な教育改善に結びつけることを目的として IR の実施に着手した。しかし、学習成果との関連などの解析において、必要なデータそのものが集約されていないため、効率的な解析ができないなど、教育上の課題が明らかになってきた。そこで、履修系統図を WEB 上で展開し、学生が自らの学びの証を蓄積する“履修系統図ポートフォリオ”を構築すると共に、IR の基盤となる情報が自動的に一元的に蓄積される仕組みを構築する。次いで、多面的な分析の基盤となる“IR 基盤データベース”を構築し、学生の学びを分析し、可視化し、サポートするための IR を実践し、教育改善を促す意思決定支援を実質化させることで薬学教育の質保証を行う。

活動実績：

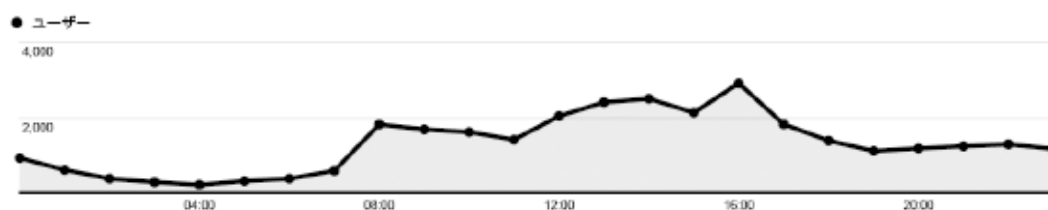
①学生の学びの可視化の手段としての履修系統図ポートフォリオの構築

a. 履修系統図ポートフォリオの構築と運用

履修系統図ポートフォリオを構築し、1 年生で利用を開始した。

具体的な運用状況（2015/4/1-2016/2/22）を下記に示す。主に 1 年生を中心に運用し、授業改善アンケートについては、全学年が使用した。

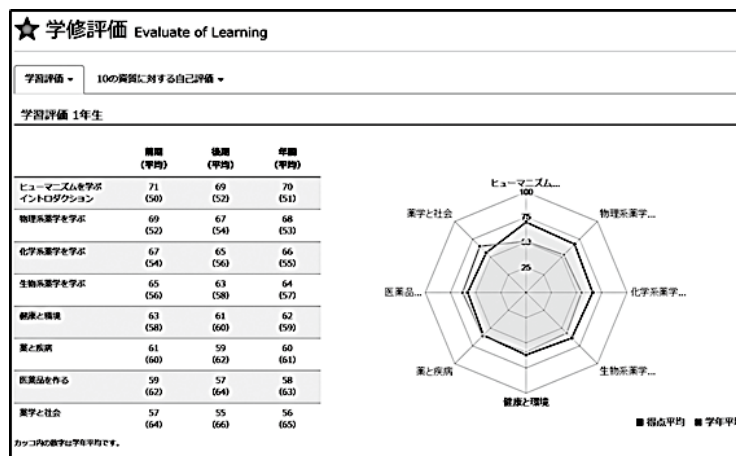
- ・学生ログイン数 → 34,237件
- ・教員ログイン数 → 1,347件
- ・マイノート件数 → 851件
- ・ページビュー総数 → 245,540件
- ・ページビュー月平均 → 22,321件（4 月～ 2 月の11で割った結果）



ブラウザ別の割合ランキング：

1. Internet Explorer (46.09%) ※主に学内や家庭 PC
 2. Safari (28.17%) ※ほぼスマホの iPhone
- その他 Chrome (16.65%)、Android Browser (3.49%)、Firefox (1.92%)

学習成果の可視化としては、右図の様に表現し、得意不得意を可視化した。授業改善アンケートについても同様のレーダーチャートでフィードバックした。



- b. アウトカム基盤型教育におけるディプロマポリシー及び10の資質についての自己評価のためのループリック作成

2日に渡って、ループリック作成 WS を開催した。

2月5日：27名 2月12日：27名

合計 54名 + 1名 = 55名 / 66名 (出席可能人数) = 83.3% 参加

拡大教授会で承認後、履修系統図ポートフォリオを利用して1年生を対象に自己評価を実施予定。

② IR 基盤データベースの構築による IR の実施と教育改善の提案

本年度、IR 基盤データベースの構築を行った。2月末に完了予定であり、これを利用して、種々の IR を実施する予定である。

活動実績：

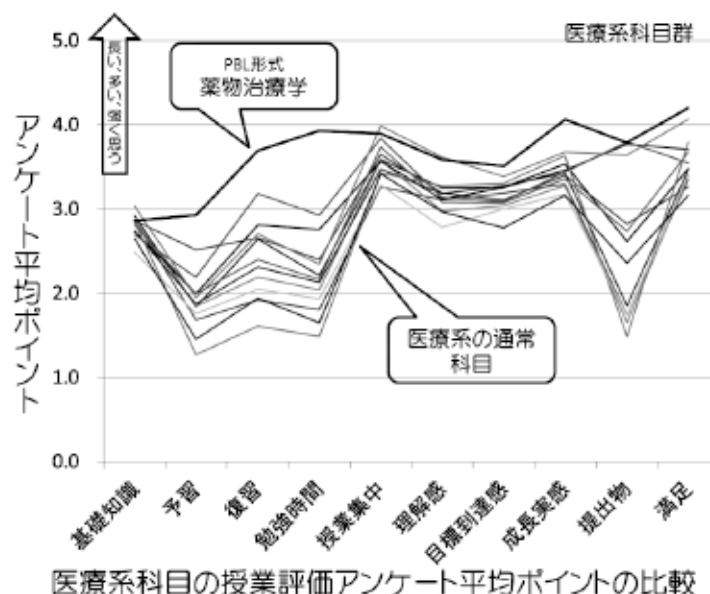
トライアルとして、前述の「深い学び、浅い学びアプローチの分析」と共に、アクティブラーニングの学習効果（間接評価）について検討した。

RQ：「本当にアクティブラーニングが学生の学びを促進しているのか？」

方法：授業改善アンケートを用い、PBL 形式の科目である「薬物治療学」と、通常の講義科目である他の医療系科目（前期13科目）の自己評価項目の平均ポイントを比較した。平均ポイントは、項目に対する選択肢に「強くそう思う」を5ポイント、「全くそう思わない」を1ポイントとして、各科目の各項目の平均を求めて使用した。授業改善アンケートは、全科目共通であり、教員の授業スキル評価項目と学生の自己評価項目からなる。

成果：

- ・ PBL 形式の「薬物治療学」は、黒太線で示したが、10項目中9項目で平均ポイントが最も高かった。
- ・ 自己評価項目の内、[基礎知識]は、いずれの科目もほぼ同じにもかかわらず、[予習]、[復習]、[勉強時間]などの授業外学習時間は、他の科目より多かった。特に[成長実感]が、他の科目と比較して非常に高く、[満足度]も最も高かった。
- ・ 高度なアクティブラーニング手法の1つである PBL 形式の授業が、授業外学習時間や成長実感、満足度において、他の授業科目と比較し、高かった。これより、RQ の「本当にアクティブラーニングが学生の学びを促進しているのか？」について、間接評価ではあるが、学生の学びを促進していると考えられる。



D. その他

①学位授与方針対応表の作成

全学での体系的な教育課程の構築に向けて、「学位授与方針対応表（科目ナンバリングを含む）」の作成を行った。

② JSAAP 試行について

理工学部、農学部、薬学部が実施。

1月末返却されたが、薬学部のデータのみとなっており、他大学との比較などについては、未返却。

返却後、3年生の成績及び授業改善アンケートと共に解析し、フィードバックする。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

A. 実質的な授業改善

①授業改善アンケートによる学生の学びの問題点の抽出

次年度も今年度と同様に履修系統図ポートフォリオの利用により、学生の学びのサポート、可視化を行うと共に、授業改善アンケートを実施し、解析や効果的なフィードバックの方法をさらに検討する。

②学びの問題点に対する教育改善方法の検討・提案

次年度も今年度と同様に、FD講演会の開催と教員への研修機会の提供を行う。

B. 学生の主体的な学びの促進

①学生フォーラムのサポート

②学びの成果の可視化

次年度も今年度と同様に、学生フォーラム実行委員会のサポートを中心として、活動を行う。また、6年生に対しては、今年度と同様に、国試対策委員会との協働による6年生の学びの記録の作成を行う。履修系統図ポートフォリオを利用した学生の学びをサポートする方策についても検討する。

C. 教育活動の可視化と IR の実施（教育の質保証プロジェクト）

①学生の学びの可視化：履修系統図ポートフォリオの構築

②IR 基盤データベースの構築による IR の実施と教育改善の提案

FD 委員会を中心に、各委員会と協働し、教育活動の可視化と問題点の把握、改善に向けた提案が行えるように、IR 基盤データベースの構築を推進する。履修系統図ポートフォリオとの連携による定型的なリサーチクエスションの検討を行い、実施する。例えば、各系列での分析したい内容について、RQ を受け付けるなど、実質的な教育改善に繋がる検討を行う。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 6 月15日	授業改善アンケート前期の履修系統図ポートフォリオによる実施について
2	平成27年 8 月20日	学位授与方針対応表の検討及び前期授業アンケートフィードバック方法、様式について
3	平成27年 9 月 5 日	前期授業改善アンケートフィードバック様式（教員、学生）の決定および IR について
4	平成27年10月 3 日	後期授業改善アンケートについて、深い学習活動調査について、FD フォーラムの発表について、MS-26推進事業アクティブラーニング採択について
5	平成28年 1 月 5 日	学生フォーラムのサポートについて（運営委員会との懇談）、後期授業改善アンケートフィードバックについて、FD フォーラムの実施について、ディプロマポリシー及び10の資質についてのルーブリック作成について、JCIRP 試行について
6	平成28年 2 月23日	ディプロマポリシー及び10の資質についての自己評価ルーブリックについて、FD 活動報告書について、後期授業改善アンケートの結果について、JCIRP 試行について、FD フォーラムについて

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 薬学研究科 ）
推進組織名（ 大学院薬学研究科 FD 委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

1) FD 委員会活動目的および任務

（目的）

名城大学大学院学則第19条の2に基づき、薬学研究科の教育内容等の改善を図るため、薬学研究科に FD 委員会を設置する。

FD 委員会は FD 活動を通じて研究科全教員が実効性の高い授業改善を進めるとともに、指導力向上を図る。

2) 平成27年度大学院薬学研究科 FD 委員会活動内容

大学院 FD 委員会を2回開催し（1回は今後の予定）、以下の点に関し委員会メンバーで議論した。

- ・前期授業改善アンケートの実施方法とアンケート結果のフィードバック方法について
- ・後期授業改善アンケート並びに特殊研究アンケートの実施方法とアンケート結果のフィードバック方法について

3) FD の取り組みを推進する具体的な活動実績

I. FD フォーラムの開催について

FD 活動を促進する学内行事として、以下の FD フォーラムを薬学部 FD 委員会と共催した（する予定である）。

①研究倫理教育講演会－科学研究における健全性の向上について－

日時：平成27年7月9日（木）16：00～18：00

i) 講師：岡山大学薬学部 教授 田中 智之氏

演題：「誠実な研究活動のために」

ii) 講師：京都薬科大学 教授 安井 裕之氏

演題：「薬学6年制における研究倫理教育の進め方」

※研究科 FD 委員会の公式行事とはしなかったが、担当教員・大学院学生にも参加の呼びかけをし、研究にとり組む心構えを芽生えさせることができたため、活動の一環として記載した。

※近年の相次ぐ研究不正行為（捏造・改竄・盗用）や不誠実な研究活動（研究助成金の不正な経理処理）を防止するため、研究者ひとり一人がとるべき行動規範や不正とならないよう気を付ける注意事項に関して、具体的事例を挙げながら紹介された。学生のみならず、教員の倫理観の醸成に大いに役立った。

②主体的な学び促進講演会

日時：平成28年3月8日（火）13：30～16：40実施予定

講師：高知大学 大学教育創造センター 准教授 立川 明氏

演題：「進度を落とさずアクティブ・ラーニング：TBL（チーム基盤型学習）」

※大人数クラスでも導入でき、学習成果の向上が見込める TBL を TBL 形式で学ぶ、というスタイルで立川氏に講演およびワークショップをお願いしている。

II. 授業改善アンケートを活用した今後の授業改善について

平成27年度「特論」科目（講義）に関するアンケートを前期・後期の終了時にそれぞれ実施した（後期は今後の予定）。アンケート結果を担当教員に配布し、次年度のシラバスや授業内容・方法の改善へ向けた情報としての利用を促した。

III. 特殊研究アンケートについて

特殊研究成果発表会後に実施を予定しており、結果を教員・学生双方にフィードバックする予定である。

IV. 名古屋大学の講義科目に関するアンケートの実施について

名古屋大学大学院医学系研究科での講義・研究に参加した本学学生（特別聴講生・研究生）を対象にアンケート調査を実施した。

V. 副指導教員との面談について

昨年度に引き続き、副指導教員との面談機会を設け、主指導教員とは異なる多様な助言が得られるような環境づくりを推進した。また、副指導教員による面談記録を主指導教員にも配布し、教育者としての多角的な指導力の醸成を図った。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

（1）授業改善アンケートを活用した本質的な授業改善方法の検討・実施

次年度も今年度と同様の解析を行うと共に、薬学部としての本質的な授業改善および学生の学びの継続性を考慮したアンケートの実施を検討する。平成27年度は、アンケートの結果から次年度シラバスにおける到達目標を担当教員間で協議して設定することとし、到達目標の偏りを防止した。平成28年度以降も、大学院講義の実施方法について教員、学生双方における改善点等を大学院運営委員会で報告し、翌年度の講義方法について、各系列で検討する予定である。

また、必要に応じて、大学院講義の在り方について、学部FD委員会と協同し、FDワークショップの実施を検討する。

（2）「教育」の工夫や実践を知る機会の提案、提供

次年度も今年度と同様に、FD講演会の開催と教員への研修機会の提供を行う予定である。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 7 月 7 日(火)	1. 平成27年度 前期授業改善アンケートについて
2	年度内	1. 平成27年度 後期授業改善・特殊研究アンケートについて

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 都市情報学部・研究科 ）
推進組織名（ 都市情報学部 FD 委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

活動方針として、都市情報学部では、これまで大学院生のみ実施していた「社会人基礎力診断テスト」を学部生も対象とし実施すること、従来の「授業改善アンケート」の調査対象科目を拡大して実施し、全教員が授業改善の課題・工夫を明確にし、学部・大学院全体として授業改善に取り組むこととした。

平成27年度の活動内容および実績等は以下のとおりである。

①学生の主体的な学びに関する取組

都市情報学部 FD 委員会委員（4名）に対する「アクティブ・ラーニング」の実施状況の調査において、講義・演習・ゼミナールにおいて様々な方法で「アクティブ・ラーニング」が実践されていることが確認された。しかし、全教員が「アクティブ・ラーニング」を実践しているかは確認できていないため、教授会にて、いかにして「アクティブ・ラーニングを授業に取り入れるか」について、各科目担当者による現状検証や、関連して今後予定している各種調査への協力についての依頼を行った。調査実施に向け、内容・方法等については、現在 FD 委員会内にて検討を行っている。

②フィールドワークや語学研修等の多様な学修経験に関する取組

国際専門研修プログラム3件（持続可能な都市のあり方を中国で学び交流する（中国・桂林理工大学）、ワルシャワ大学名城大学相互ホームステイ・プログラム（ポーランド・ワルシャワ大学）、東南アジアで成長する日本企業の海外戦略を学ぶ）を実施、併せて前述研修プログラム修了者、国際交流センター主催海外語学研修修了者、インターンシップ・プログラム修了者に対して、所定科目の単位認定を行っている。

③その他学部独自の取組

今年度の活動方針として掲げた学部生に対する「社会人基礎力診断テスト」を実施、大学院生および学部生に社会人基礎力（「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の12要素）を把握させるとともに、結果を各指導教員へとフィードバックし、学生の修学指導の一助としている。また、継続的に実施することにより、各学年の傾向や個々の学生の成長度合いの把握を行っている。

また、すべてのゼミナールにおいて、卒業研究に関する発表会（対外的な学会発表や研究会を含む）を実施し、卒業論文の質的向上を目指した。

もう一方の方針である「授業改善アンケート」については、従来の調査科目に1科目追加し、平成27年度後期から2科目（演習科目を除く）の調査を実施した。

また、学部においては、新入生を対象としたリメディアル教育の一環の「ファンデーションコース」と、正課授業である「教養演習Ⅰ（キャリア形成論）」と「学習力調査」の報告

会を教授会前に実施し、新入生或いは履修学生の状況と経年変化の報告に加え、今後の展開などの情報を共有した。

その他、本学部学生の修学指導強化として、委員会（教務委員会、学生委員会）および教授会内で指導基準・方法等を議論・意見交換を経て制度化された新基準による修学指導面談を実施、その他、学生の状況・様子、講義の受講状況の報告に加えて、教員間での講義運営方法等について必要に応じて情報交換を行った。

都市情報学研究科においては、成績評価・論文審査・研究進捗の確認などはなされているものの、「指導方法が効果的であったか、適切であったか、改善の余地はないか」など、ファカルティ・デベロップメント（FD）の取組みが十分にはなされていなかったため、大学院学務委員会を中心に検討を行い、大学院生に専門知識や問題解決力の向上とともに、社会人基礎力のスキルアップが必要と考え、教員および大学院生に以下の「社会人基礎力育成プログラム」への参加を義務付け、修士論文や博士論文の成果向上に反映させる活動を平成25年度より開始し、平成27年度においても同様なFDに取り組み、大学院生の研究推進および発表活動の活性化に繋げている。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

今年度より導入した学部学生に対する「社会人基礎力診断テスト」の実施により、社会人基礎力（「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に関する12要素）を把握させるとともに、学生の傾向・個々の学生の成長度合いの把握、修学指導を継続的に行う。大学院生には、引き続き、社会人基礎力のスキルアップのための「社会人基礎力育成プログラム」への参加を義務付け、修士論文や博士論文の成果向上の定期的な検証を継続的に行う。

また、授業改善アンケートについては、各担当科目の次年度シラバス内容や講義方法の見直しに役立てることを目的とする。次年度は、学部独自の追加調査科目1科目を精査し、実施を軌道に乗せたうえで、将来的に全科目調査の実施に向けた検討を行う。

その他、講義・ゼミナール運営の工夫・改善点についての意見交換、学生の受講状況等についての情報共有、大学院においては、教員の研究指導方法の改善の促進等により、学部・大学院教育の質向上に関する構成員の理解と改善への取組みの動機付けとする。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 4 月 3 日 (都市情報学部 FD 委員会)	・ 社会人基礎力診断テストの実施方法について ・ 大学院生と学部生の FD 評価の作業分担について
2	平成27年 4 月23日 (教授会構成員)	・ 教授会報告 学部生における社会人基礎力診断調査（4月17日都市情報学概論で実施）結果等を踏まえて
3	平成27年 5 月27日 (都市情報学部 FD 委員会)	・ 社会人基礎力診断シート（ゼミ生用）の内容確認と実施方法 ・ 各学部・研究科等における FD 取組み ・ 大学院生社会人基礎力診断結果を受けての努力目標について ・ 今後の都市情報学部として全教員が取り組むべき FD とは
4	平成27年 5 月28日 (教授会構成員)	・ 教授会報告 学部生の社会人基礎力診断調査（平成27年度前期）の実施について
4	平成27年 5 月28日 (研究科委員会構成員)	・ 研究科委員会報告 大学院生の社会人基礎力診断調査（平成27年度前期）結果等を踏まえて
5	平成27年 6 月25日 (教授会構成員)	・ 教授会報告 平成27年度後期からの学生授業評価講義科目の拡大について
6	平成27年 9 月10日 (教授会構成員)	・ ファンデーションコース・キャリア形成論および新入生学習力調査の実施結果報告会
7	平成27年 9 月24日 (教授会構成員)	・ 教授会報告 アクティブ・ラーニングの授業への導入について
8	平成27年10月22日 (教授会構成員)	・ 教授会報告 学部生の社会人基礎力診断調査（平成27年度前期）結果を踏まえて
9	平成27年10月 1 日～12月31日 (教授会構成員)	・ 全ゼミナールにおける卒業研究の中間報告会の実施
10	平成28年 1 月22日 (都市情報学部 FD 委員会)	・ 平成28年度の授業改善アンケートの実施について ・ 社会人基礎力診断テストの実施について ・ 今後の FD のあり方について
11	平成28年 2 月10日 (大学院学務委員会・FD 委員会合同)	・ 修士論文審査発表会において、修士論文発表に対する大学院生のペアレビューの実施と、社会人基礎力診断テストの実施
12	平成28年 2 月29日 (大学院学務委員会・FD 委員会合同)	・ 修士課程および後期博士課程の中間発表会において、研究発表に対する大学院生のペアレビューの実施と、社会人基礎力診断テストの実施

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（人間学部）
推進組織名（人間学部 FD 委員会）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

人間学部 FD 委員会は、FD 委員 5 名、学務委員長、入試委員長および教務事務職員によって構成される。人間学部の教員団の教育・研究を含めた資質・能力向上を活動目標として FD 活動に取り組んでいる。平成27年度には以下に取り組んだ。

- ・人間学部 FD 委員会を 5 回開催した。
- ・前期に新任教員を交えての授業に関する意見交換会を開催した。
- ・後期（平成28年 3 月10日）に計画している人間学部・人間学研究科共催の FD フォーラムについての検討を進め、実施する予定である。
- ・後期に学務委員会（教務）と人間学部 FD 委員会による「独自教材の作成と活用」をテーマとした FD ミニフォーラムを開催した。

平成27年度に 5 回開催した FD 委員会では、前期・後期における FD 活動の計画および進め方に関して協議を行った。また、全学 FD 委員会に関する報告により、人間学部 FD 委員会内で FD 活動についての情報共有がなされた。

前期（7 月）には、平成27年 4 月に本学に着任した新任教員を交えて、名城大学の授業について気軽に語り合い、授業における工夫等を交換・共有し、授業づくりに活かす機会とすることを趣旨とした意見交換会を開催した。これは、2008年より数年にわたり開催された全学 FD 委員会による T&L CAFE を参考として、FD 委員 8 名と新任教員により構成されるかたちをとることで試みたものであり、「学生の学習態度・授業マナー」「施設・学習環境」「教授法」を主なトピックとした。授業形態やクラスによっては教授法にさらなる工夫が必要であること、全学的に導入している IC 出欠確認システムについての検討や見直しの必要性、パワーポイントおよび黒板の使用、さらには大学生として身につけておくべきスタディスキルの問題などが、今後さらに検討すべき課題として浮かび上がってきた。その後、教授会でこの意見交換会の報告がなされた。

後期（2 月10日）には、学務委員会（教務）と人間学部 FD 委員会との合同のかたちで、「独自教材の作成と活用」をテーマとする FD ミニフォーラムを開催した。人間学部の必修科目である「基礎ゼミナール」「人間学総論」で利用できる独自教材の作成と活用に関して実施したアンケートの結果を踏まえた上で、情報共有および意見交換を行った。後期ではさらに、学生の主体的な学び（アクティブラーニング型学修）に関わる取り組みについて、大学院（人間学研究科）FD 委員会とも協力して（学部）FD 委員会において協議を重ねてきた。その結果、平成28年 3 月10日に金沢医科大学より本田康二郎氏を講師として招聘し、「クリティカル・シンキング（批判的思考）教育」をテーマとする FD フォーラムを開催することが決定された。講演の後、意見

交換が行われる予定である。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

人間学部の学生の4年間における学びを支援するための、教育内容および教育環境のさらなる改善に取り組むために、学生の授業満足度を高めるための教育改善に向けた検証と分析に取り組む予定である。そのために、以下のFD活動を予定している。

- ・FD委員会の開催
- ・FD情報の共有化のための活動
- ・学外講師を招聘してのFDフォーラム開催

本学部・本研究科では、大学生および大学院生の学びの前提になる技量の育成が図られているが、専門的な知見をも含めて深く批判的に吟味し、必要に応じて自発的に調べ、考え抜いた「見解」を形成するところまで到達させるためには教育方法のさらなる工夫が必要である。そこで、教育内容および教育技法の改善・向上のための人間学部・人間学研究科の具体的なFD活動として、来年度にも学外講師をアドバイザーとして招聘し、FDフォーラムを後期に開催することを予定している。本取り組みにより、学生の「クリティカル・シンキング（批判的思考）」教育の活動をより充実したものとして具体化できるのではないかと考えている。

尚、本報告の共通課題のうちの「フィールドワークや語学研修等の多様な学修経験に関する取り組み」については、人間学部の専門教育部門に「語学研修」「海外研修」「海外フィールドワーク」「フィールドワーク」等が該当する体験科目として在るが、FDの観点からの改善に向けた取り組みに着手するまでには及んでいないため今後の課題であると言える。

3. 活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年6月11日	第1回FD委員会（平成27年度人間学部FD活動計画について）
2	平成27年7月9日	新任教員を交えての授業に関する意見交換会
3	平成27年7月9日	第2回FD委員会（後期のFD活動計画について）
4	平成27年9月10日	第3回FD委員会（後期の学部・大学院FDフォーラムについて）
5	平成27年10月22日	第4回FD委員会（後期の学部・大学院FDフォーラムについて）
6	平成27年11月19日	第5回FD委員会（後期の学部・大学院FDフォーラムについて）
7	平成28年2月10日	学務委員会（教務）・人間学部FD委員会 FDミニフォーラム
8	平成28年3月10日（予定）	人間学部・人間学研究科共催 FDフォーラム

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 人間学研究科 ）
推進組織名（ 人間学研究科 FD 委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

本研究科で今年度予定していたFD活動の内容は、①院生による授業アンケートの実施とその結果の検討、②教育内容、教育技術、シラバス等の改善のための検討、③他大学研究科の指導方法の調査、④学部と共催のFDワークショップの実施であった。

①に関しては、7月初頭に研究科FD委員会において、アンケート調査項目を検討した上で、7月の下旬に実施し、その結果を9月の研究科委員会で検討した。早急に改善すべき事項は特になかったが、施設・備品等に関わる研究環境の点で、将来的に検討を継続する必要がある面も明らかになった。後期のアンケート調査に関しては、1月の研究科委員会で前期に実施したアンケートに修正を施し、現在、実施中である。その結果を3月の研究科委員会で検討する予定である。

③④に関しては、学部のFD委員会との連携で、研究科における院生の研究にとって前提になる資質・能力の育成を、まず学部段階で充実させる必要があるという認識に立ち、学部と共催で「批判的な思考力」の育成について、外部の講師を招いた学習会（学部・研究科共催FDフォーラム）を立案し、3月初旬に実施する予定である。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

本年度は、上記の②に関して、授業アンケートの実施やFDフォーラムの立案過程を通じて、部分的な検討をしてきているが、カリキュラム全体を見据えた系統的な検討はできていない。従って、研究科の理念を念頭に置いて、カリキュラム全体の適切性を検討することが、次年度に向けた課題となる。

また、本年度実施予定のFDフォーラムは、主に学部の基礎教育を想定したものであるため、その成果をより高いレベルに活かしていく方策を模索していくことが、次年度の研究科のFD活動の課題となる。

これ以外に、③の他大学の研究科の指導方法に関する調査に関しては、FDフォーラム以外に、本研究科と専門分野が近似する大学院を対象にして研究指導の方法、組織、施設等に関する本格的な調査を実施する必要がある。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 7 月 3 日	FD 委員会 授業アンケートの検討
2	平成27年 7 月 9 日	研究科委員会 授業アンケートの検討・承認
3	平成27年 7 月23日	FD 委員会 授業アンケート実施の打ち合わせとインタビューの実施
4	平成27年 9 月10日	研究科委員会 授業アンケート結果の報告と検討
5	平成27年 9 月10日	FD 委員会（学部と共催） FD フォーラムの計画
6	平成27年10月22日	FD 委員会（学部と共催） FD フォーラムの講師選定
7	平成27年11月19日	FD 委員会（学部と共催） FD フォーラムの詳細
8	平成28年 1 月21日	研究科委員会 後期授業アンケートの検討
9	平成28年 3 月10日（予定）	FD フォーラム

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 総合学術研究科 ）
推進組織名（ 総合学術研究科教育検討部会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

本研究科の構成員により、以下の活動を推進してきた。

① 学生の主体的な学びに関する取組

- ・「総合学術特論 I・II」の開講

学際的な探求活動を通じ、受講生が発表と討論の技能を高めることを目的として開講された。

- ・「H27年度総合コアプログラム」の開催（春季：4月4日、秋季：9月19日）

全教員・全大学院生が参加し、教員、修了生、及び外部講師による講演を行うことで、本研究科のミッション「自然と人間の共生」について幅広い視野で学び、考える機会とした。

② 多様な学修経験に関する取組

- ・「タイにおける地球環境改善プログラム」の実施（8月6日～8月13日）

本研究科の大学院生を含む学生11名と総合学術研究科の教員3名が参加した。タイにおいて植林等の地球環境に関わる活動を行うと共に、タイ国立科学技術研究所等へ訪問して最新のバイオ燃料に関わる研究結果等について議論を行った。

- ・「海洋実習」の実施（8月24日）

本研究科大学院生に対して実施された。理工学部及び薬学部の学生も参加することで合計参加学生数は16名となり、総合学術研究科の教員4名が引率した。三河湾において船舶による海洋観測を行った後、愛知県水産試験場にて最新の海洋環境に関連する研究を学んだ。

③ その他

- ・「H27年度総合学術研究科講演会」の開催（8月20日）

本研究科専任教員を対象とした学術講演会を開催した。

演題：「Characterization and Identification of Multi-Enzyme Producing Bacterial Strain Isolated from the Gastrointestinal Tract of Milkfish *Chanos chanos* Forsskal」

講演者：Francis S. Legario 助教（フィリピン ILOILO Science and Technology University）

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

教育改善に向けて構成員全員が議論・実践できるよう、教育検討部会を中心に検討を継続する。年6回の開催目標を達成すべく、積極的に教育検討部会による会議の場を設けることが今後の課題である。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 5 月20日	H27年度秋季総合コアプログラムにおける講演テーマと外部講師の検討（1 回目）
2	平成27年 7 月16日	H27年度秋季総合コアプログラムにおける講演テーマと外部講師の検討（2 回目）
3	平成27年10月 1 日	総合学術研究科における FD 取組内容の共有と検討（1 回目）
4	平成27年10月 9 日	カリキュラム変更に関する検討
5	平成27年10月15日	副指導教員のあり方に関する議論
6	平成28年 1 月28日	総合学術研究科における FD 取組内容の共有と検討（2 回目）

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 法務研究科 ）
推進組織名（ 法務研究科 FD 委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

- （1）大学基準協会の「専門職大学院認証評価」に対する「追評価」のための「実地調査」を受けた（10月26日）。また、そのために必要となる資料（「回答書」）を準備した。
- （2）「授業改善アンケート」において、「履修登録者数5人未満（昼夜開講同一科目の場合は昼夜合わせての数）」の場合は「アンケート調査から除く」としているが、5人未満の場合であってもアンケート調査をしてはどうかとの提案があり、その可能性を探った。実施した場合における「自由記述欄」への記述によって回答学生が特定されるおそれについて、これをどのように考えるかを含めて引き続き検討することとした。
- （3）教育開発センター主催のFD学習会「アクティブ・ラーニング講習会」(12月18日)に出席し、アクティブ・ラーニングの実践例を体験した。
- （4）今年度後期に、単位互換で提携している南山大学法科大学院の教員による授業参観があった。このような授業参観は、提携して以来、初めてのことである。参観の対象となったのは当方の2科目、参観教員は南山大学から2名であった。
- （5）日弁連主催のセミナー「法科大学院と企業内法務」（7月24日）に、当研究科所属の教員2名が参加した。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

（1）FD取組推進組織

法務研究科内に設けられたFD委員会は、各期終了時に定期的に、また事案に応じて随時に、会議をもち、またはメール等で連絡を取り合っている。この方式を来年度も続けたい。

（2）FD活動

本年度は、上記1（1）「追評価」のための「実地調査」を受けたことが、他年度と比べての特徴であった。来年度は、上記1（2）「履修登録者数5人未満の科目」のアンケート調査の仕方・その是非の検討を続けるとともに、恒常的に法務研究科（法科大学院）に求められている諸課題（司法試験合格者の輩出など）に取り組んでいきたい。

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 4 月11日	前期に実施予定の各事項の確認と、FD 委員間の役割分担の調整。
2	平成27年 9 月12日	後期に実施予定の各事項の確認。
3	平成27年 9 月26日	大学基準協会の「認証評価」（「追評価」）における「実地調査」の際の資料（「回答書」）の作成。
4	平成28年 2 月20日	本年度の総括と来年度に向けた方針の検討。

なお、このほか実施事項等について、適宜、随時に、委員会を開催し、協議している。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 大学・学校づくり研究科 ）
推進組織名（ FD 推進委員会 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

今年度は、本研究科の募集停止を踏まえ、平成27年度入学者の学修環境を最後まで整えることに重点を置いて、FD 懇談会を中心とする組織的な FD 活動を実施することを目標とした。また、これまでの本研究科の成果を修了生の今後の研究活動につなげるような取り組みを検討することも目標に加えた。

これらの目標を達成するために、FD 懇談会を定期的に開催し、以下のことについて取り組んできた。

（1）大学院学生の研究指導・支援について

①研究指導体制

社会人学生の実態に合った指導時間の設定やきめ細かな指導を行うことができるよう、指導教員、副指導教員を決定した。

②フィールド調査

国内、海外のフィールド調査の日程や調査地、調査内容、調査実施や報告書作成に関して、学生への支援を行った。

③授業改善および研究推進

様々な文献紹介を FD 懇談会内で行い、学生の学修を十分保障するための授業改善や研究推進のための取り組みについて意見交換を行い、改善を図った。

（2）活動内容・研究成果の公表について

①研究科創設10周年記念行事

今年度は研究科が創設されて10周年となるため、研究科10年の歩みを踏まえて創設の志を新たにし、持続的な学びのコミュニティ発展を基盤とする目的で、修了生と在学生による研究会を開催した。研究会には、修了生、在学生、元教職員や現教職員が多数出席し、活発な意見交換がなされた。

②フィールド調査報告会

学生によるフィールド調査の報告会を実施することを決定し、研究の質の向上や発表スキルの充実につながるような支援について検討した。

③ Web ページによる情報発信

研究科の Web ページの更新を検討し、最新の研究科の体制について情報発信を行った。

（3）研究・教育環境の整備について

研究科内にサーバを設置し、そのサーバ内に情報共有のためのデータベースを構築した。これにより、これまで研究科で蓄積してきた様々なデータを、教職員をはじめ修了生や在学生も含め、活用できるようになった。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

本研究科の募集停止を踏まえ、次年度も引き続き、平成27年度入学者の学修環境を最後まで整えることに重点を置いて、FD懇談会を中心とする組織的なFD活動を実施する。また、これまでの本研究科の成果を修了生の今後の研究活動につなげるような取り組みについても検討を続ける。

特に、今年度は情報共有のためのデータベースの構築を行ったので、学修コンテンツの提供、Webページなどによる研究科の情報発信を行う。また、次年度は2回の研究科紀要の発刊を予定しているため、投稿する学生への支援を行う。

3. 活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年4月7日	研究指導・支援、フィールド調査、研究科創設10周年記念行事、研究科情報関連
2	平成27年5月12日	倫理研究、院生研究助成、研究科情報関連、国内・国外フィールド調査、研究科創設10周年記念行事、蓄積データの管理・活用
3	平成27年6月2日	研究科創設10周年記念行事、フィールド調査、授業改善・研究推進のための文献検討、Webページによる情報発信
4	平成27年7月7日	研究科創設10周年記念行事、国内フィールド調査、授業改善・研究推進のための文献検討、データベース構築の検討、国内フィールド調査報告会
5	平成27年9月1日	研究科創設10周年記念行事、国内フィールド調査、研究科紀要、国内フィールド調査報告会
6	平成27年10月6日	授業改善・研究推進のための文献検討、国内フィールド調査、研究科紀要、国内フィールド調査報告会
7	平成27年11月3日	国外フィールド調査、研究科紀要、修士論文
8	平成27年12月1日	国外フィールド調査、研究科紀要、修士論文、次年度研究科紀要

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（ 教職センター ）
推進組織名（ 教職センター会議 ）

1. 平成27年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

＜活動方針＞

- ①教員採用試験に向けた学生の主体的な学びへの支援の充実
- ②学校ボランティア活動の充実
- ③教職課程の教職に関する科目の授業内容・方法の改善

＜目標＞

- ①採用実績の向上
- ②学校ボランティア活動への積極的参加を促す
- ③教職実践演習の内容の改善

＜活動内容＞：その他独自の取組

- ①各種勉強会の組織と運営
- ②学校ボランティア受け入れ先に関する情報の収集と学生への紹介
- ③各自の演習内容の交流と共通に取り組むべき課題の確認

＜実績＞

- ①現役学生の合格者25名が26件合格（教職センター開設以来最高）。
学生の要望を踏まえた比較的参加学生数が少ない教科に関する勉強会も開設した。
- ②学生の主体的な参加が中心のため、量的な実数を掌握し切れていないが、ボランティア活動
に関しては、学校側の必要と要望が増えており、参加学生の数も増えていると思われる。
- ③シラバスの見直しと改善を行った。

2. 今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

教職課程科目におけるアクティブラーニング導入に向けての活動

教職センター教員の授業力アップに向けた研究活動の深化と交流

3. 活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日 程	議 題
1	平成27年 6 月23日	平成27年度後期勉強会について
2	平成27年 7 月14日	平成27年度教職実践演習プログラムについて
3	平成27年 9 月29日	一般教養の勉強会について
4	平成27年10月27日	平成27年度 FD 活動の推進について
5	平成27年11月24日	平成28年度シラバスの作成及び編集について
6	平成27年12月 8 日	平成28年度シラバスについて

5. トピックス

第17回 FD フォーラム実施報告

10月28日（水）、天白キャンパス共通講義棟東3階 H304教室において、第17回 FD フォーラムを開催した。今回は、「教育の内部質保証～その基盤づくりと実際～」をテーマとし、教職員、他大学関係者等105名が参加して行った。

はじめに、吉久光一学長から開会の挨拶があり、続いて、FD 委員長でもある野口光宣副学長から、本フォーラムの趣旨説明に続いて、「本フォーラムにおける報告を、学修行動調査の導入を検討するうえでの一助としていきたい」と提言された。

基調講演では、「双軸の教学 IR 調査がひらく教育の内部質保証」をテーマに、お茶の水女子大学 教育開発センター 半田智久教授を迎え、内部質保証システムの構築についての基調講演が行われた。調査を通じた学生の学修動機づけの発揚や教学の実態把握など、その実施意義の高さについて述べられるとともに、GPA の特性の周知による単位制度の実質化の方策についても報告があった。

「名城大学の教育改善の取組」として、理工学部 社会基盤デザイン工学科 新井宗之准教授と、薬学部 薬学科 大津史子教授から、本学の学内 GP である「教育の質保証プロジェクト」で採択された、教育の内部質保証に関わる取組の事例報告があった。

全体の質疑応答では、本発表に関する多くの質問・意見が寄せられ、活発な議論が行われた。最後に、安藤大学教育開発センター長から、本フォーラムでの報告をきっかけとして、教育の内部質保証について見つめ直すことで、今後の本学の教育の質保証に繋げてほしいとの纏めをもって、第17回 FD フォーラムを閉会した。



内部質保証システムについての基調講演をされる半田教授

第17回 FD フォーラム 所属別参加状況

	所属人数 (※1)	FD フォーラム		
		参加人数	参加率	前回参加人数
教育職員				
学長・副学長	5	3	60.0%	2
法学部	38	2	5.3%	4
経営学部	34	0	0.0%	5
経済学部	32	8	25.0%	14
理工学部	179	9	5.0%	13
農学部	52	8	15.4%	8
薬学部	75	14	18.7%	10
都市情報学部	27	0	0.0%	0
人間学部	20	3	15.0%	7
大学院理工学研究科	0	0	0.0%	0
大学院法務研究科	16	0	0.0%	2
総合学術研究科	0	0	0.0%	0
大学院大学・学校づくり研究科	3	1	33.3%	0
教職センター	7	1	14.3%	0
総合研究所	1	0	0.0%	0
新学部開設準備室	3	0	0.0%	0
小計1	492	49	10.0%	65
非常勤講師 (※3)	－	1	－	
小計2		1		
事務職員				
監査室	2	1	50.0%	0
秘書室	4	1	25.0%	2
経営本部	22	0	0.0%	1
MS - 26推進室	1	0	0.0%	0
新学部開設準備室	3	1	33.3%	0
新キャンパス開設準備室	2	0	0.0%	0
総合政策部	5	3	60.0%	5
総務部	17	0	0.0%	0
渉外部	10	0	0.0%	1
財政部	16	2	12.5%	3
施設部	13	0	0.0%	0
入学センター	14	0	0.0%	0
学務センター	36	4	11.1%	11
教職センター	5	0	0.0%	2
保健センター	11	0	0.0%	0
大学教育開発センター	7	5	71.4%	7
学術研究支援センター	18	0	0.0%	1
キャリアセンター	24	1	4.2%	3
国際化推進センター	8	0	0.0%	0
情報センター	6	1	16.7%	0
附属図書館	9	0	0.0%	0
法学部	7	0	0.0%	0
経営学部	6	0	0.0%	0
経済学部	7	0	0.0%	0
理工学部	24	2	8.3%	2
農学部	19	0	0.0%	0
薬学部	12	1	8.3%	3
都市情報学部	9	0	0.0%	0
人間学部	5	2	40.0%	1
附属高校	13	0	0.0%	0
小計	335	24	7.2%	42
役員				
役員 (※2)	10	0	0.0%	0
その他				
附属高等学校教諭	95	0	0.0%	0
学部生・大学院生	－	0	－	0
学外者	－	31	－	40
その他	－	0	－	0
小計	95	31	0.0%	40
合計	932	105	11.3%	147

※1 平成27年度所属人数(教員…助手を含む。特任教授は含まない。/事務職員…契約職員を含む。派遣職員は含まない。)

※2 学長・副学長は除く。(教育職員「学長・副学長」に含む。)

※3 研究員含む

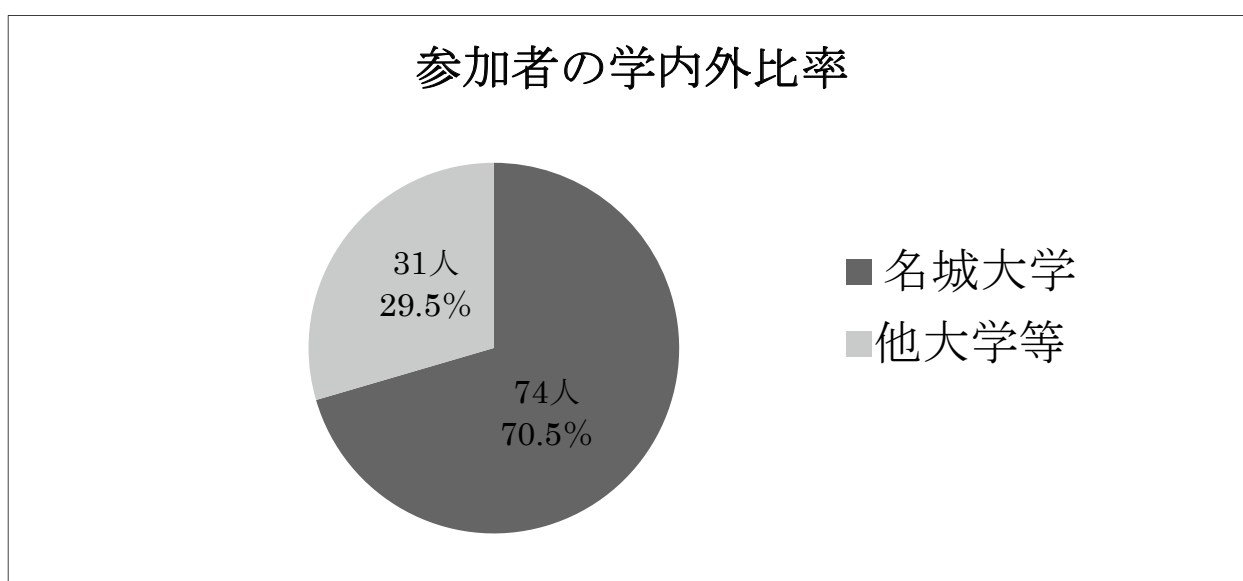
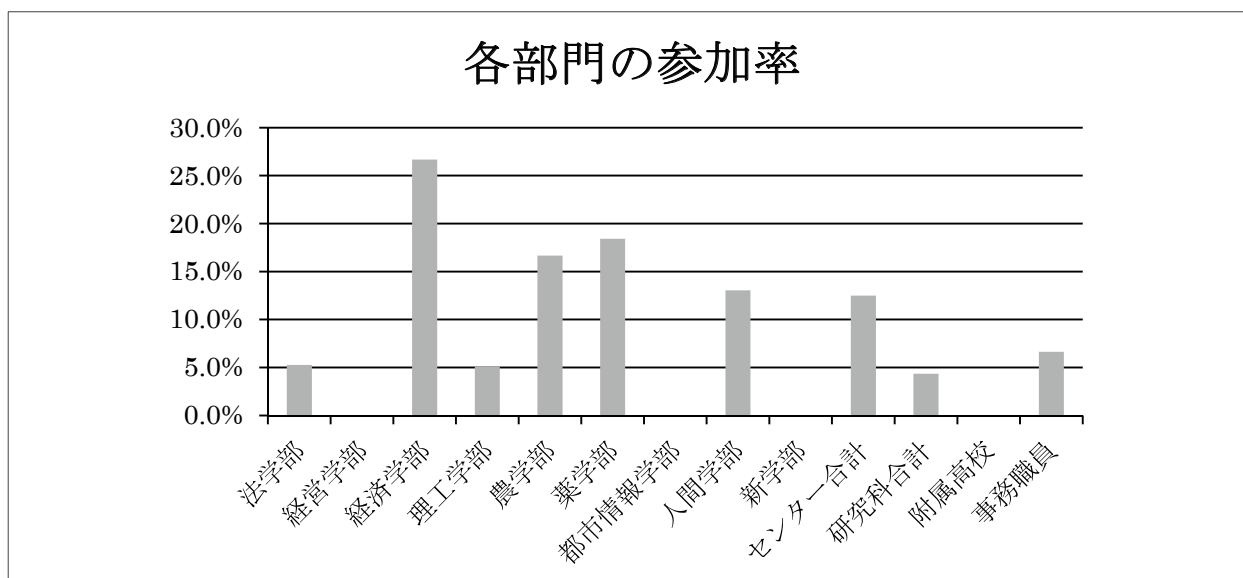
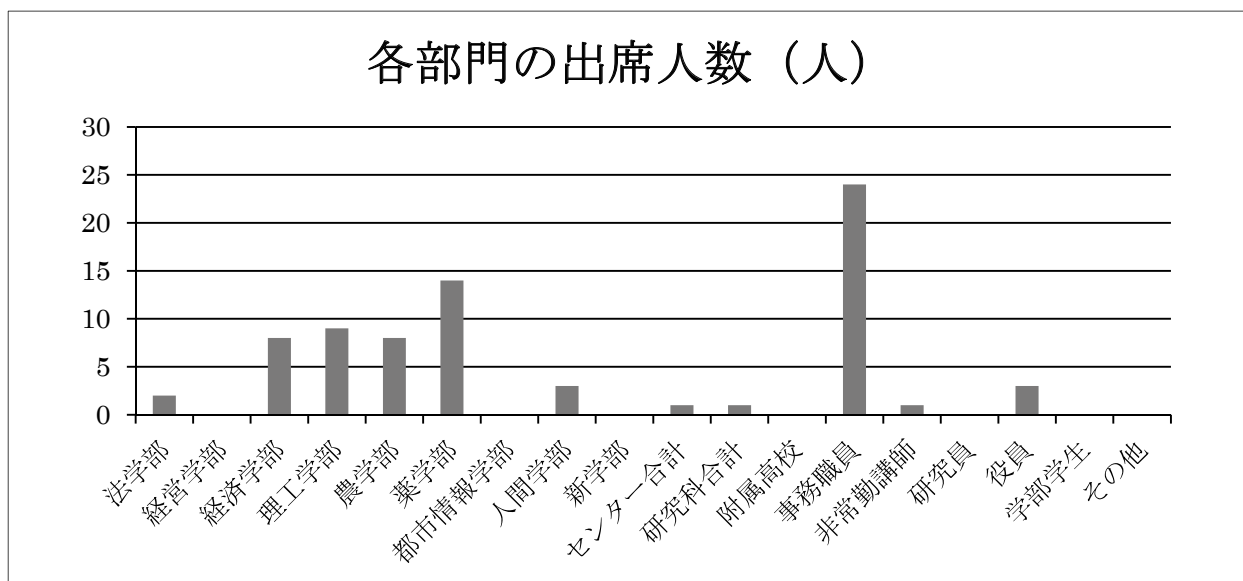
第17回 FD フォーラム 参加者アンケート集計結果

1. 参加者のデータ

① 参加者の属性（表）

所属等		出席人数 (人)	在籍者数 (人)	各部門の 参加率 (%)	参加者の 構成比率 (%)	学内外 人数 (人)	学内外 比率 (%)
名城大学	法 学 部	2	38	5.3%	1.9%	74	70.5%
	経 営 学 部	0	33	0.0%	0.0%		
	経 済 学 部	8	30	26.7%	7.6%		
	理 工 学 部	9	176	5.1%	8.6%		
	農 学 部	8	48	16.7%	7.6%		
	薬 学 部	14	76	18.4%	13.3%		
	都市情報学部	0	27	0.0%	0.0%		
	人 間 学 部	3	23	13.0%	2.9%		
	新 学 部	0	3	0.0%	0.0%		
	センター合計	1	8	12.5%	1.0%		
	研 究 科 合 計	1	23	4.3%	1.0%		
	附 属 高 校	0	96	0.0%	0.0%		
	事 務 職 員	24	362	6.6%	22.9%		
	非常勤講師	1	—	—	1.0%		
	研 究 員	0	—	—	0.0%		
	役 員	3	11	27.3%	2.9%		
	学 部 学 生	0	—	—	0.0%		
	そ の 他	0	—	—	0.0%		
他大学等	教 育 職 員	10	—	—	9.5%	31	29.5%
	事 務 職 員	12	—	—	11.4%		
	民 間 企 業	9	—	—	8.6%		
	他 大 学 生	0	—	—	0.0%		
	そ の 他	0	—	—	0.0%		
計		105			100.0%	105	100.0%

② 参加者の属性（グラフ）



2. アンケートデータ

① アンケート回答者の属性（表）

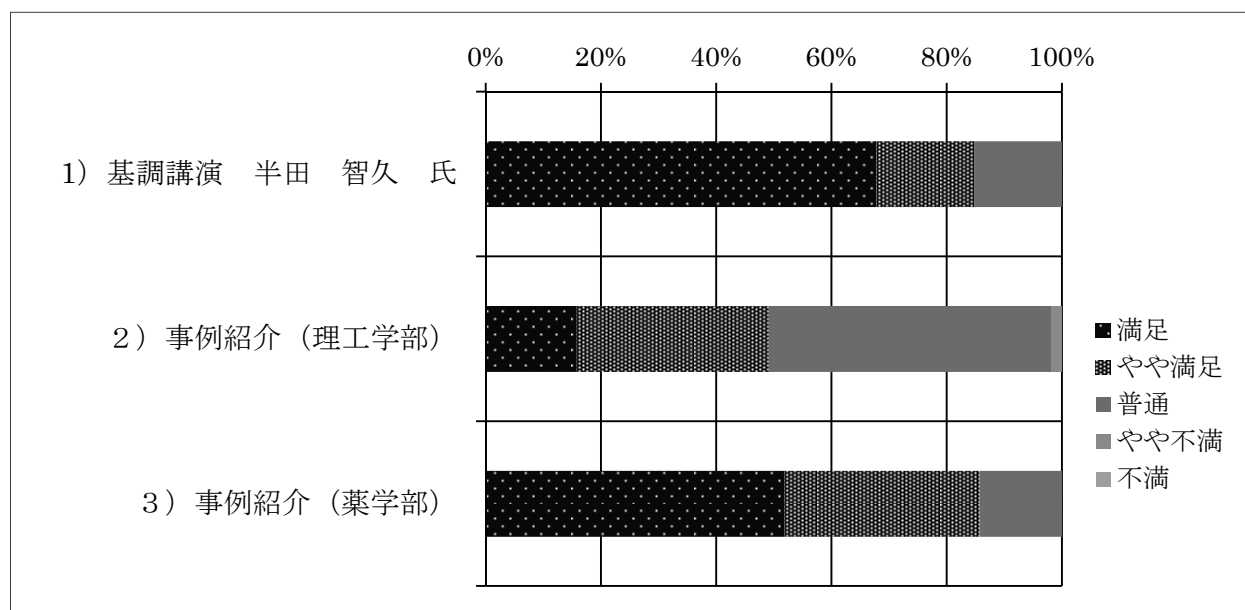
所属等		回答者数（人）
名城大学	専任教員	25
	非常勤講師	1
	職員	8
	大学院生	0
	学部学生	0
	その他	0
他大学	教員	8
	職員	11
高等学校	教員	0
	職員	0
その他		6
未回答等		2
計		61

② 各プログラムの満足度（表）

プログラム名	各項目の回答者数（人）					
	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	計
1) 基調講演 「双軸の教学 IR 調査がひらく教育の内部質保証」 （講師：お茶の水女子大学 教育開発センター 教授 半田 智久）	40	10	9	0	0	59
2) 事例紹介（理工学部） WEB を用いた理工学教育・学生指導等支援シ ステムの構築 （報告者：理工学部・社会基盤デザイン工学科 准教授 新井 宗之）	9	19	28	1	0	57
3) 事例紹介（薬学部） アウトカム基盤型教育の実現をサポートする IR 実践のための基盤システムの構築 （報告者：薬学部・薬学科 教授 大津 史子）	29	19	8	0	0	56

	割合（%）	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	計
1) 基調講演 半田 智久 氏		67.8%	16.9%	15.3%	0.0%	0.0%	100.0%
2) 事例紹介（理工学部）		15.8%	33.3%	49.1%	1.8%	0.0%	100.0%
3) 事例紹介（薬学部）		51.8%	33.9%	14.3%	0.0%	0.0%	100.0%

③ 各プログラムの満足度（グラフ）



3. 今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて（自由記述まとめ）

- ・ IT の機能を最大限に利用して多くのデータが得られることが分かった。学生にも負担を少なくすることができ、名城大でも取り入れれば良いと思います。
- ・ おもしろかったです。
- ・ リニア・ループリック手法と alagin の導入。
- ・ Web をいかにうまく使い、低コストで教育のサポートができるか、学生のサポートができるか。
- ・ アンケートで学生に意識付けさせることはおもしろいと思った。
- ・ 半田先生のお話が非常に示唆に富んでいて、今後仕事をする上で大変参考になった。
- ・ オートポイエーシスに根ざした自律性に力点を置く調査システムの効用。
- ・ ICT を使った振り返りシステムの効用。
- ・ 組織内発的な質保証の取り組み。
- ・ ICT の有効な活用。
- ・ FD の一環としての IR を進めていく中で、必要なシステムの整備をすることが急務ではあるが、それよりも肝要で難易度が高い点が、教職員の姿勢と意識醸成であるということ。
- ・ GPA はファンクショナル GPA を使わないとだめですね。名城大の GPA も是非ファンクショナル GPA を使って下さい。
- ・ GPA について。
- ・ 内部質保証について。
- ・ 現代にあった授業アンケート方法にすべき → 旧来のやり方にとらわれていた。
- ・ GPA の算出方法 → これまでの経験や結果からのデータなのでとても参考になった。
- ・ ICT 技術を利用した運用が必要。全学的に共通の ICT Web ツール（システム）を持つべきと感じました。
- ・ GPA の導入が重要。
紙媒体のアンケートは回収率が低くなる。データの分析が大事。それを提示する。
アンケートの結果を集計し、可視化することで学生が気づき、浄化作用がまわり、学生自らが成長、考えるようになる。
- ・ IR 調査結果から教育の内部質保証に導く仕組み。
- ・ 授業アンケートにより学生自身が教員の希望していることを理解できるとされたこと。
- ・ 全学的な IR システムの構築が必要だと感じた。
- ・ 個々で教員や学部がシステム構築をすることはとてもエネルギーと時間が必要であり、全学的に効率的ではないように思う。
- ・ 今回初めて薬学部で行われている取組を知りました。
弊社は貴学薬学部 初年次教育に携わっており、ぜひ結果をフィードバックいただき（若干不安もありますが・・・）、今後の講座に反映していきたいと思います。
- ・ 昨年に続き 2 回目の参加です。貴重なお話を拝聴させて頂いています。多くの先生方が積極

的に参加していらっしゃり、素晴らしいフォーラムだと感じています。

- ・全体を通して非常に興味深い内容でした。紙ベース・大学独自のカリキュラム等を Web ベース・他大学との共通基盤を使用する点は今後の主流になっていくと感じました。ただ、第 2 部の新井先生の話にもありましたが、個人情報の流出などセキュリティ面が最重要の課題だと強く実感しました。
- ・PDCA サイクルを廻さなければならない、CAP 制を守らなければならない、というしほりに捉われず、色々とトライをして IR 分析をして教育改善をしていけば良いというのはとても“ため”になりました。名城大学も、全体で進められなければダメということではなく、良い事例はどんどんチャレンジして改善できる方針に変えていってほしいと思います。
- ・IR 関連
 - ・教育の内部質保証のためのアンケートシステム、分析システム、運用組織の充実。
 - ・学修行動調査そのものが学生意識を高めるということ。
 - ・内部質保証へのアプローチとしての教学 IR、FD 活動について、各大学、学部毎の特徴があり、興味深く伺いました。
 - ・学部毎のアプローチ、全学的なアプローチ、それぞれ最適化を進めることで取り組みの効果を最大化できるのではないのでしょうか？
 - ・「評価とその手法」は今後日本で求められる能力の変容とともに大きく変わるものと思います。ただ何かを鵜呑みにして適用すればよいものではない、という問題提起はこれからも必要でしょう。今後の先生方のご活躍をお祈りしております。
 - ・データを集めて利用することで、学生と運営両方にメリットがある点。
 - ・年に 1 回の FD フォーラムで大学教育の根源に触れるという意味でリフレッシュさせてもらっています。ありがとうございました。
 - ・学生の自己調整ということがとても重要だと思います。この辺について更に追究したいと思っています。
 - ・貴重な講演をありがとうございました。
 - ・教学 IR を実践していくために何をどのようにやっていけばよいかがわかりました。学生の自己調整力を高めることができるような、また全学的に取り組めるような仕組みづくりをこれから検討していきたいと思いました。
 - ・IR 調査、学修行動調査の重要性を実感した。エビデンスに基づく教育改善こそが重要であり、方向性を明示してくれるものであると痛感した。
 - ・この FD フォーラムに参加してよかったと実感しております。ありがとうございました。
 - ・名城大学では教育支援システムを大学運営レベルで構築してほしい。学部・学科レベルだと予算・人的条件で無理である。これまで紙ベースで授業評価アンケートを実施しているが、Web の活用に移行してほしい。
- ・ファンクショナル GPA
- ・ICT の活用による内部質保証
- ・IR によって何をしたいのかという目的や仕組みについて、いろいろ考えさせていただきま

した。ありがとうございました。

- ・ IR はデータの収集・分析だけでなく、活用の仕方・見せ方が重要であると思いました。
- ・ 学修行動調査のシステム構築が非常に重要であると認識した。お茶の水女子大のシステムをそのまま使わせていただくというのも一方策かもしれません。
- ・ GPA の読み違い
- ・ functional GPA
- ・ nigala ウェブシステム
- ・ 履修系統図ポートフォリオ
- ・ 医療系学部におけるコアカリキュラムの SBO 達成のための作業として学生個々の詳細なデータベースの構築と管理の重要性を再認識できた。
- ・ 半田先生の、アンケートの設問により学生自身が自己改善をするようになること。
- ・ 学生さんが学問に興味を持つことを 3 人の先生が望んでいらっしゃる点に関心を持ちました。教育の質を数量によって評価することには限界があるということを理解してご発表されていた点。

4. 学部の教育改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどがあればお聞かせください。

- ・ 理工学部のシステムは他学部でも大いに活用できそうです。ぜひオープンにしてください。
- ・ 各部独自の教学プログラム、特質に合った教学マネジメント、IR 活用の有効性。
- ・ Web を利用した授業アンケートの実施。
- ・ 学部独自の特長もあり、なかなか難しいかと考えるが、全学共通の厳しさを痛感しました。
- ・ 教育に携わる人間として教育、教育の評価方法に関して考え直すきっかけとなりました。
- ・ 所属学部である程度できる様な裁量権を頂ければと思います。学務センターに相談すると“それはむずかしい”という回答が戻ってくることが多いと感じます。ぜひ改革を進める視点で（文科省のごきげんを伺うのではなく）サポートをお願いします。
- ・ 「マイノート」は参考になりました。今の学生はどんどん写真で保存しますね。
- ・ 教育の効果は即効性のあるもの・ないもの、測定ができるもの・できないもの等様々で、資質や態度など表現しきれない能力を身につけさせることの大切さが希薄になっている現状がある様に思います。
- ・ まずは成績、アンケート結果などのデータをリンクさせて教育改善に資するためのシステムをつくる必要があると感じた。

5. FD のフォーラムで扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたらご記入ください。

- ・ 学修成果の可視化について。
- ・ fact book 等情報の共有、公表について。
- ・ 教学 IR と研究、経営分野での IR の有機的な連携について。

- ・今回のように、大学全体の FD を改善するテーマも大切だが、個々の教員の能力を高めるようなテーマを扱って欲しい。
- ・自校史
- ・各大学の歴史と社会的役割
- ・学生全員に端末（iPad）を持たせる ICT + Web 講義、教育の事例。教科書、ノート等の紙媒体の不要。
- ・成績不振の学生に対するフォロー。
- ・学生のモチベーションの維持。
- ・大学入試改革に向けた入試・教務関係の他大学の取り組みについて。
- ・FD を行う意義が分かるテーマ、特に事務系管理職に向けたものがあったても良いかと思います。
- ・学生の職業選択とキャリア支援に関して。
- ・ICT の利用、Web の利用の実際について。
- ・学生の日本語運用能力を向上させるためにはどうしたらよいか。
- ・学生が英語力を向上させるためにはどのようにしたらよいか。
- ・全ての学部に通して求められる日本語運用能力とは。

第 17 回 F D フォーラム アンケート 平成 27 年 10 月 28 日 (水)

本日は第 17 回 F D フォーラムにご参加いただきありがとうございました。
 今後のフォーラムの企画をはじめ、F D 活動の取り組みにおいて参考になるご意見をいただきたいと思いますので、本アンケートにご回答くださいますようご協力をお願いいたします。いただきましたアンケートのご意見は、今後の取り組みの参考にさせていただきます。ご記入後は受付に回収箱を用意していますので、退出の際にお入れください。

1. あなたについてお聞かせください。(該当するものに○をつけてください)

- 【名城大学】 1.専任教員 2.非常勤講師 3.職員 4.大学院生 5.学部学生 6.その他 ()
 【他 大 学】 7.教員 8.職員
 【高等学校】 9.教員 10.職員
 【そ の 他】 11.その他 ()

2. 本日の企画内容についてお聞かせください。

プログラム名	該当するものに○を付けてください。				
1. 基調講演 「双軸の教学 I R 調査がひらく教育の内部質保証」(お茶の水女子大学 教育開発センター 教授 半田 智久氏)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
2. 事例紹介 (理工学部) WEB を用いた理工学教育・学生指導等支援システムの構築 (報告者: 理工学部・社会基盤デザイン工学科 准教授 新井 宗之)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
3. 事例紹介 (薬学部) アウトカム基盤型教育の実現をサポートする I R 実践のための基盤システムの構築 (報告者: 薬学部・薬学科 教授 大津 史子)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満

3. 今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて、具体的にお聞かせください。

- ****
4. 学部の教育改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどがあればお聞かせください。

5. FDのフォーラムで扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたら下記にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

名城大学 FD委員会

当日配布資料

1



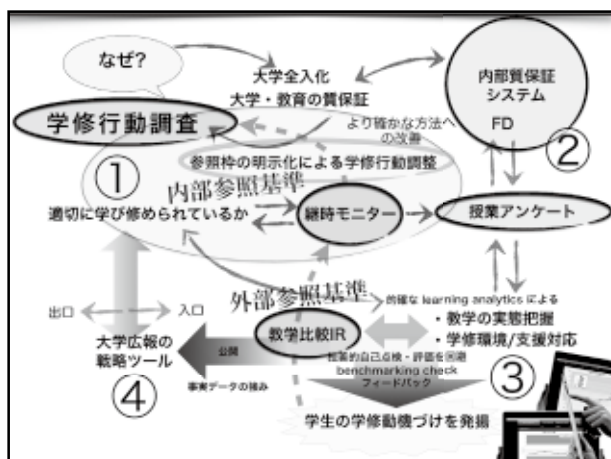
2

学生への学修行動調査と学生からの授業アンケート、この2つの調査は教務部の文脈においてその目的と効用があらたな次元に入り、教育の内部質保証を支える基幹的営みとして活きるようになってきました。

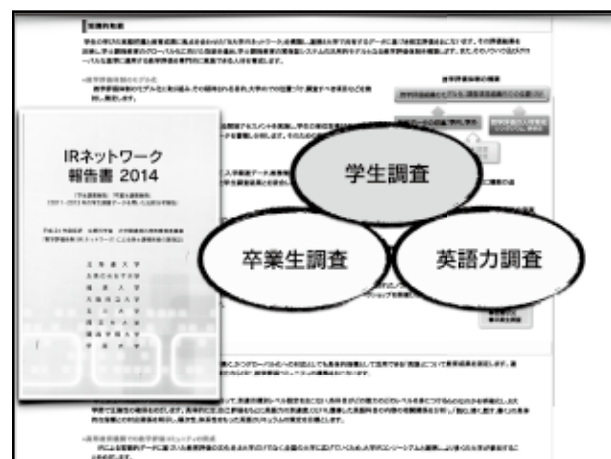
この電報はいかにもたらされたか。

その将来にわたり持続可能な進化の条件となった直接経費ゼロ・寡少実務での実施、それだけで従前にない効果発揮をもたらす仕組みの実施の姿と今後に向けたビジョンを提示します。

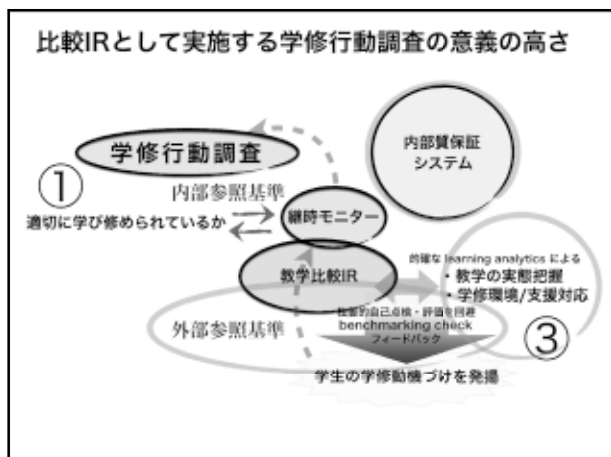
3



4



5

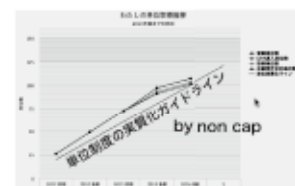


6

■ 履修単位数制限(CAP)に拠らない単位制度の実質化を実現

学生による主体的な学修行動に単位の実質化を期待し、促す
そのサポートとして

- ② 学修成果情報システムalaginによる適切な単位履修（制度の実質化）のガイドラインの提示と個々の学生の履修状況の可視化



7

■ 履修単位数制限(CAP)に掲らない単位制度の実質化

学生による主体的な学修行動に単位制を
そのサポートとして

① GPAの特性周知（不合格の組入）
修で学修時間過多になりGPAに悪影響

② 学修成果情報システムalaginによる
質化）のガイドラインの提示と個々の

Year	Average Number of Units Completed per Student
2009	30.0
2010	29.5
2011	27.8
2012	27.5
2013	27.5
2014	26.8
2015	26.5

検証 外部評価対応と内部質保証の仕組みの確立

① 事実データにおいて履修単位数の減退をモニター

② 学修行動調査により比較IRにおいて単位制度の実質化が事実上、
達成できていることを確認

8

■比較IR 履修制限に匹敵する授業時間外学修時間確保の確認

質問「授業時間外に授業課題や準備学修、復習等をしている時間は週あたり何時間程度ですか？」

percent
%

2013年1年生調査

お茶の水女子大学 capなし 2014
お茶の水女子大学 capあり
北海道大学（女子のみ）capなし
文・理・経で周42、理・工で46

同志社大学 capあり
立命館大学 capなし
岡山大学 capなし
岡山大学 capあり
岡山大学 capなし
岡山大学 capあり

2週間前 2週間後 4週間前 4週間後 6-8週間前 6-8週間後 10-12週間前 10-12週間後 16-20週間前 16-20週間後 20週間以上

○ その他大1 ● その他大2 ▲ その他大3 ▼ その他大4 ◆ その他大5 ◇ その他大6 ○ その他大7 □ その他大8 △ その他大9 ▽ その他大10

いずのデータも対称は1年生

Kalman-Gurwitsch test 2013
お茶大1年生 si=233 s2=6987 Smax = 6.38505#166137415 p<.001 ***significant
お茶大1年生・女子 si=239 Smax = 6.36838#166137415 p<.001 ***significant
お茶大1年生・男子 si=239 Smax = 6.36838#166137415 p<.001 ***significant

的確なlearning analyticsの適用

9

的確なlearning analyticsの適用

GPAが高いということは、どういうことなのか

学修行動調査でGPA上位群 × 下位群の間にあらわれた有意差
上位25% α 5.17 下位25% α 2.17

学修期間	GPA上位 (%)	GPA下位 (%)
1学期前半	100	10
1学期後半	50	35
2学期前半	10	50
2学期後半	0	15

統計的有意差: $\chi^2=109$ $p<0.001$ $\phi^2=0.10$ $\phi_{max}=0.4182$ $p<0.001$
***significant

1年生、3年生共にGPA上位群は下位群に比較して、
「授業に欠席しない」
「遅刻しない」
「提出期限までに授業課題を完成させる」という3点において明白に異なる自己評価を示した。
これらは真面目な勤務態度、納期を守る姿勢という職業人としての素養を証している。

出口 → 入口

修学期間をつづいた学修成果に基づく人材証明

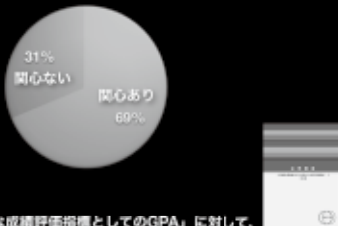
大学広報の戦略ツール

④

10

社会からの関心

GPAの普及に伴いこの指標に対する社会からの関心が
確実に高まりだしている



関心度	割合
関心あり	69%
関心ない	31%

「総合的な成績評価指標としてのGPA」に対して、
日本の上場企業437社からの回答

2012年 10/30調査

11

functional
■ 授業時間外の学習時間とGPAの関係分析

学習分析
学習の把握/理解
学習成果/学習効果
学生の学習動機づけを促進

GPA 2.9 over

GPA 2.3

2013-14年度
14年度
13年度

右欄の図表を参照した学生の人数

7 全学年 1 授業外 2 1-2時間 3 3-4時間 4 5-6時間 5 7-8時間 6 9-10時間 7 11-12時間 8 13-14時間 9 15-16時間 10 17-18時間 11 19-20時間 12 21時間以上

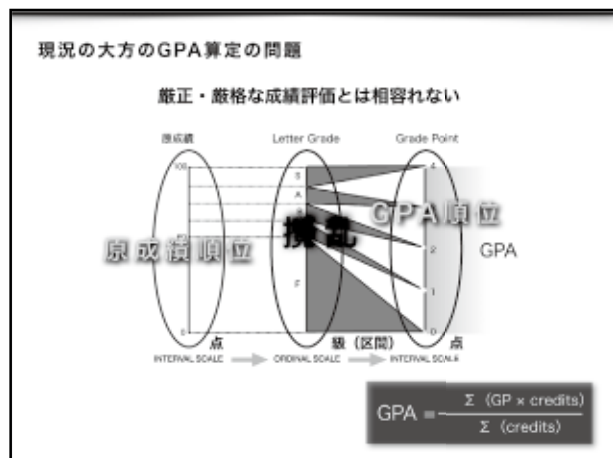
1週15時間までは授業時間外学習の時間数が高いという学生ほど、
正比例的により高い学修成果がもたらされる事実が認められた。

1週あたり15時間の授業時間外学習時間

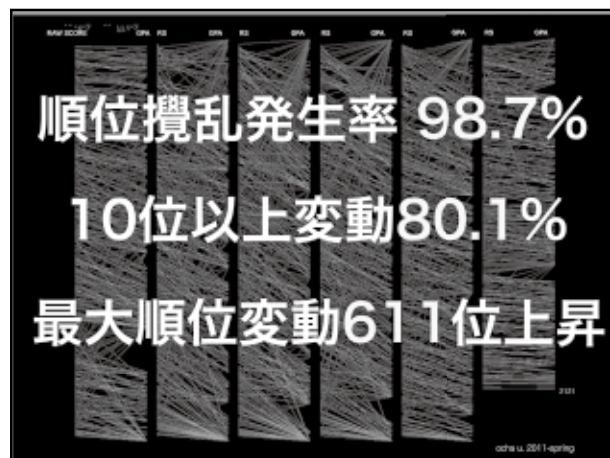
12

そのGPAで大丈夫ですか ?!

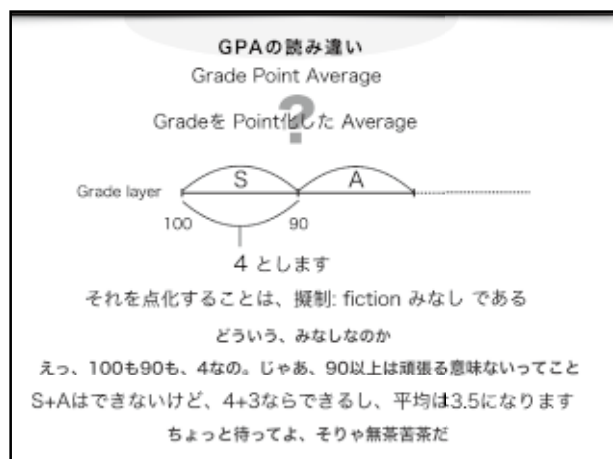
13



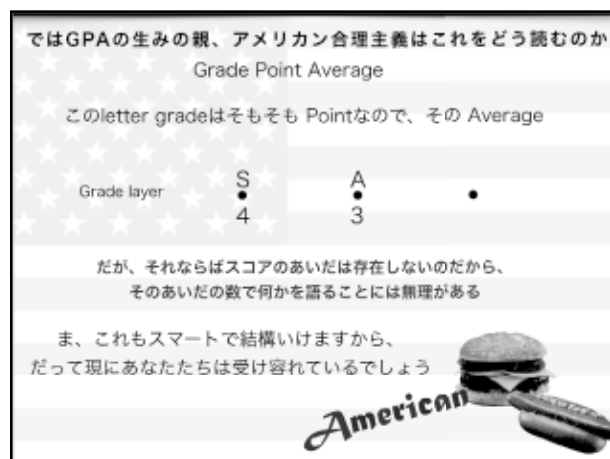
14



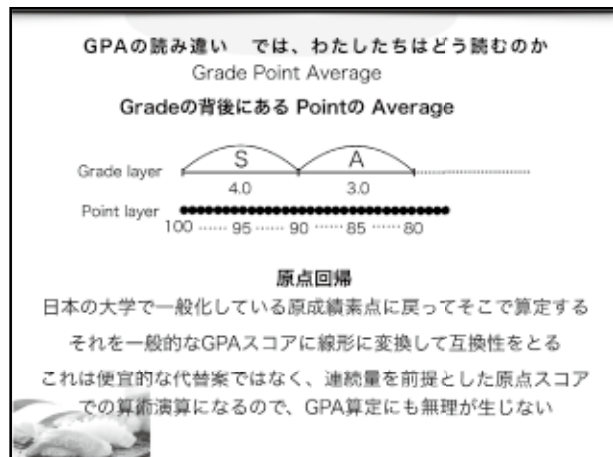
15



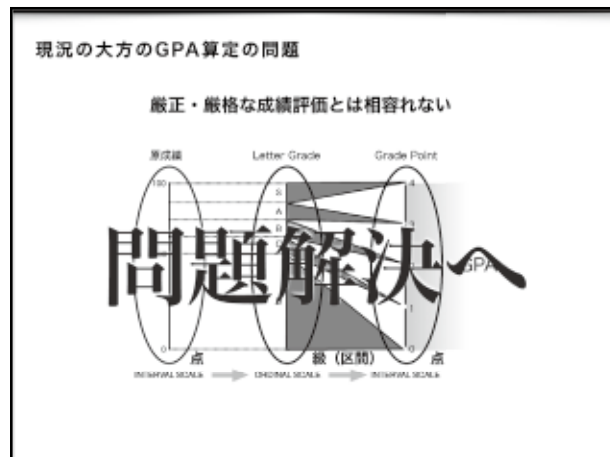
16



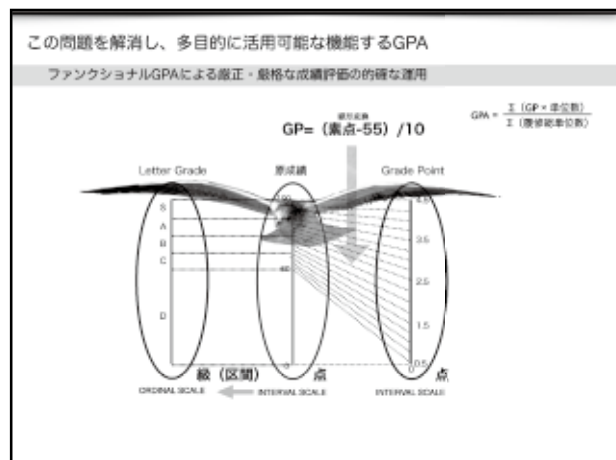
17



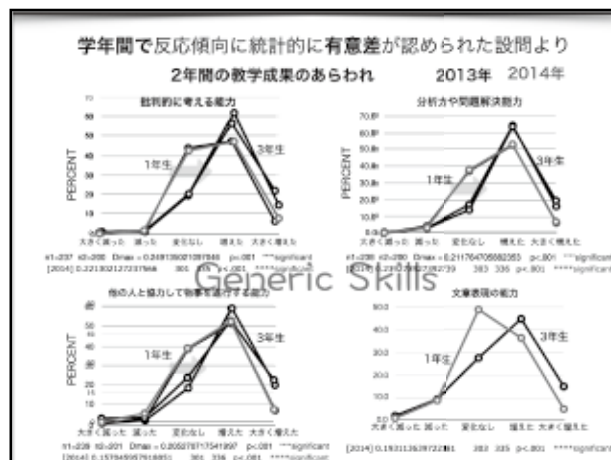
18



19



20



25

IR連携事業で得た課題

Big Data相手に集計の山に埋もれて見るべきところ
がわからなくなったり、部分的な名辞にとらわれて
短絡的な判断に陥らないよう

適切な統計分析により、有意な差異を選択的に析出し、
見るべきポイントを焦点化

的確なlearning analyticsの適用により
必要な教学運営判断と内部質保証に結びつける

26

IR連携事業で得た課題 三題

① 調査結果の分析 的確なlearning analyticsの適用
結果が集計値の相互比較に留まっていたは不十分で、ときに実態認識を誘導する。
実態についての的確な分析が不可欠。

② 調査設問の設計 精緻化と精選
尋ねたいことがらは山々だが、回答者が容易するような質問款で問いたること
から得られることがどのような結果をもたらすかを考える必要がある。

③ 調査方法 長期的に持続可能

27

③ 調査方法 長期的に持続可能

大幅なコスト削減と分析を含めた実施時間の短縮、労務
負担の徹底軽減が必要

内部質保証の基盤にする上で安定的かつ自律性
のある実施継続性能を必要とするため

web 3.0 3rd.reality

労務/時間/経費におけるコストフリーの実現へ

最新のICT : web環境を活用

28

最新のICT : web環境を活用

■ 大学に入学してからの様々な学習活動について調査を行う。

■ 新たな学習環境として大学の環境で、どのようなことを学習する機会がとれるかを調査したい。

A. 実施、実施、アンケートワークシートを提出し、学生が学習環境の学習

昨年 調査期間2014年10月17日～11月12日
実質3週間

回収率 **70%**

そのノウハウを捕捉

29

最新のICT : web technologyを適用

■ 大学に入学してからの様々な学習活動について調査を行う。

■ 新たな学習環境として大学の環境で、どのようなことを学習する機会がとれるかを調査したい。

A. 実施、実施、アンケートワークシートを提出し、学生が学習環境の学習

本日
最新 調査期間2015年10月15日～10月28日
2週間

回収率 ? 今現在は

30

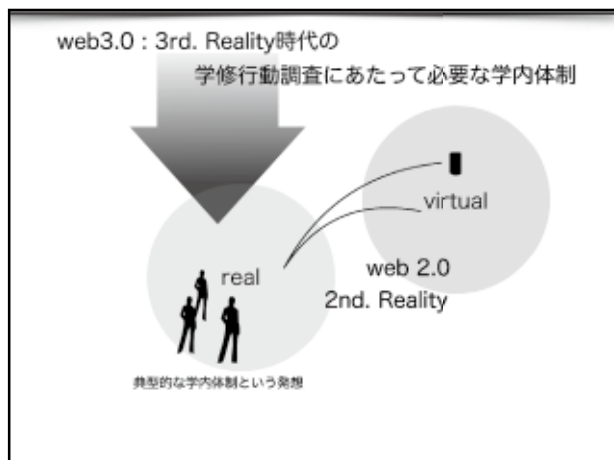
web3.0 : 3rd. Reality時代の
学修行動調査にあたって必要な学内体制

real

1st. Reality : 前世紀まで

典型的な学内体制という発想

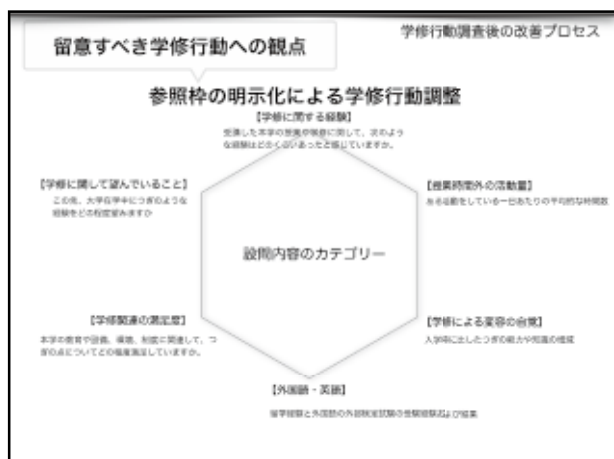
31



32



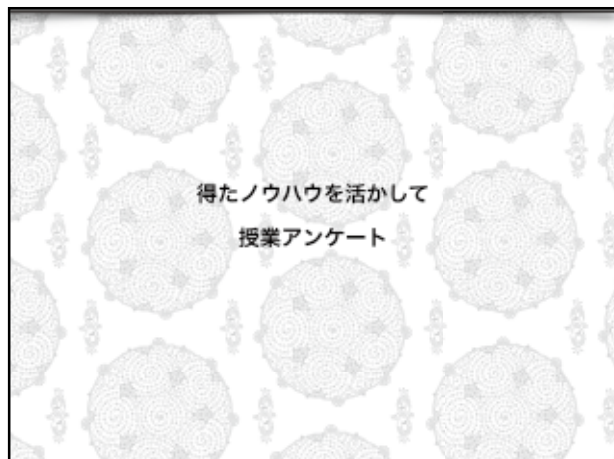
33



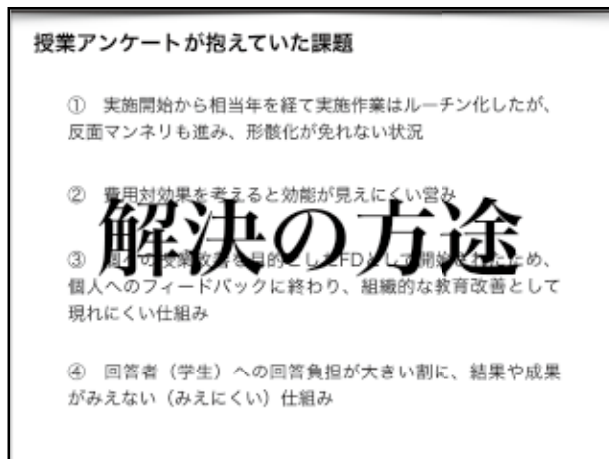
34



35



36



37

授業アンケートが抱えていた課題

① 実施開始から相当年を経て実施作業はルーチン化したが、反面マンネリも進み、形骸化が免れない状況

抜本的改訂

目的の見直し
FDに加えて教育の内部質保証を支える基幹システムへ

内容の見直し
学務行動調査との切り分けと、これまでの経験にもとづくコンパクト化

方法の見直し
質問紙配布・回収・読み取りから、webベースの電子化とプロセスの自動化

活用の見直し
個々の教員へのフィードバックから、データベース・アクセスによる経年比較や公開対応

38

授業アンケートが抱えていた課題

② 費用対効果を考えると効能が見えにくい業務

改善

効果

効果は事前に測り難いが、この問題は確実に高められる

このミニマムコストはいかに実現できるか

39

授業アンケートが抱えていた課題

② 費用対効果を考えると効能が見えにくい業務

改善

効果

典型的20世紀手法

費用

授業アンケート調査関係

40

授業アンケートが抱えていた課題

② 費用対効果を考えると効能が見えにくい業務

改善

効果

3rd.reality

配信・回収

41

授業アンケートが抱えていた課題

② 費用対効果を考えると効能が見えにくい業務

改善

効果

3rd.reality

参照・比較

42

反応抽出法

リニア・ループリック手法

43

ループリックはよいが、いまひとつ… 評価階梯跳躍の問題

TEAMWORK VALUE RUBRIC
© 2000 University of Wisconsin-Madison

Teamwork is the capacity to coordinate individual efforts to achieve common goals. It is the ability to observe, understand, and respond to the needs of others in a team. It is the ability to work with others to achieve common goals.

	1	2	3	4
Contributes to Team Meetings	Member contributes minimally, attending the meeting but not participating.	Member contributes moderately, attending the meeting and participating in some discussions.	Member contributes significantly, attending the meeting and participating in most discussions.	Member contributes maximally, attending the meeting and participating in all discussions.
Respects the Contributions of Team Members	Member does not respect the contributions of others, often interrupting or talking over others.	Member respects the contributions of others, but does not always listen to them.	Member respects the contributions of others, and listens to them.	Member respects the contributions of others, and listens to them.
Individual Contributions Outside of Team Meetings	Member does not contribute outside of team meetings.	Member contributes outside of team meetings, but does not always do so.	Member contributes outside of team meetings, and does so regularly.	Member contributes outside of team meetings, and does so regularly.
Values Contributions from Team Members	Member does not value the contributions of others, often dismissing them.	Member values the contributions of others, but does not always do so.	Member values the contributions of others, and does so regularly.	Member values the contributions of others, and does so regularly.
Responds to Conflict	Member does not respond to conflict, often avoiding it.	Member responds to conflict, but does not always do so.	Member responds to conflict, and does so regularly.	Member responds to conflict, and does so regularly.

44

ループリックはよいが、いまひとつ… デジタル的に割り切れないもどかしさ

TEAMWORK VALUE RUBRIC
© 2000 University of Wisconsin-Madison

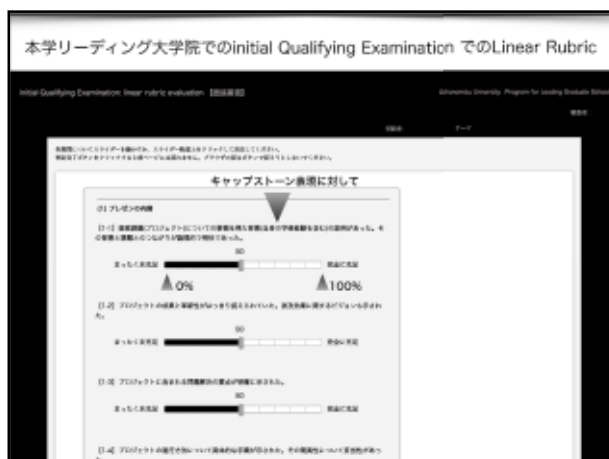
Teamwork is the capacity to coordinate individual efforts to achieve common goals. It is the ability to observe, understand, and respond to the needs of others in a team. It is the ability to work with others to achieve common goals.

	1	2	3	4
Contributes to Team Meetings	Member contributes minimally, attending the meeting but not participating.	Member contributes moderately, attending the meeting and participating in some discussions.	Member contributes significantly, attending the meeting and participating in most discussions.	Member contributes maximally, attending the meeting and participating in all discussions.
Respects the Contributions of Team Members	Member does not respect the contributions of others, often interrupting or talking over others.	Member respects the contributions of others, but does not always listen to them.	Member respects the contributions of others, and listens to them.	Member respects the contributions of others, and listens to them.
Individual Contributions Outside of Team Meetings	Member does not contribute outside of team meetings.	Member contributes outside of team meetings, but does not always do so.	Member contributes outside of team meetings, and does so regularly.	Member contributes outside of team meetings, and does so regularly.
Values Contributions from Team Members	Member does not value the contributions of others, often dismissing them.	Member values the contributions of others, but does not always do so.	Member values the contributions of others, and does so regularly.	Member values the contributions of others, and does so regularly.
Responds to Conflict	Member does not respond to conflict, often avoiding it.	Member responds to conflict, but does not always do so.	Member responds to conflict, and does so regularly.	Member responds to conflict, and does so regularly.

45



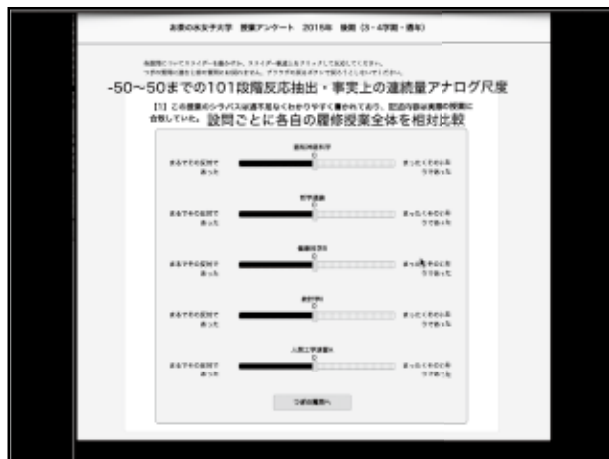
46



47



48



49



50



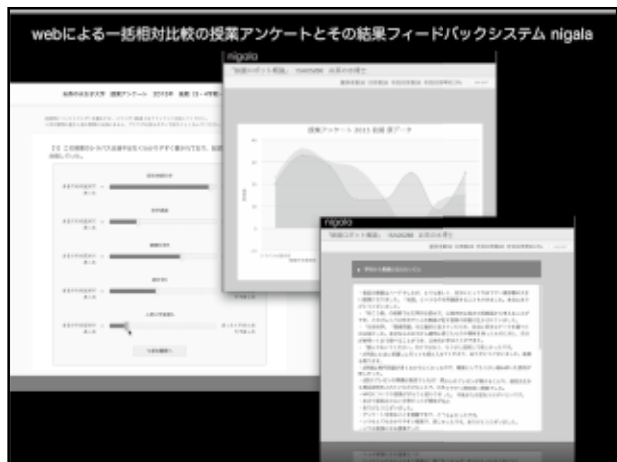
51



52



53



54

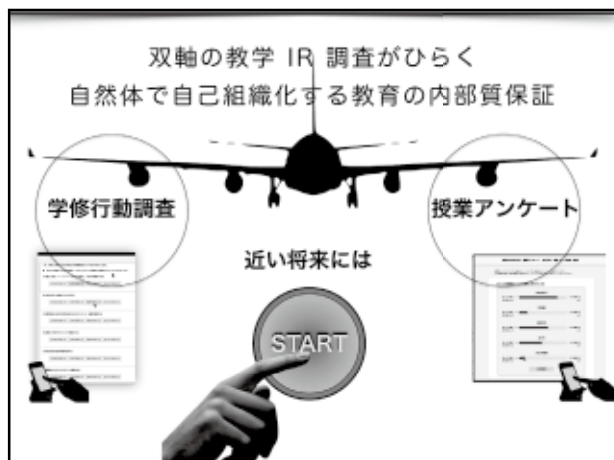
授業アンケートが抱えていた課題

- ① 実施開始から相当年を経て実施作業はルーチン化したが、反面マンネリも進み、形骸化が免れない状況
- ② 費用対効果に乏しい、効果が限定的な授業改善
- ③ 個々の授業改善に留まり、組織的な教育改善として現れにくい仕組み
- ④ 回答者（学生）への回答負担が大きい割に、結果や成果がみえない（見えにくい）仕組み

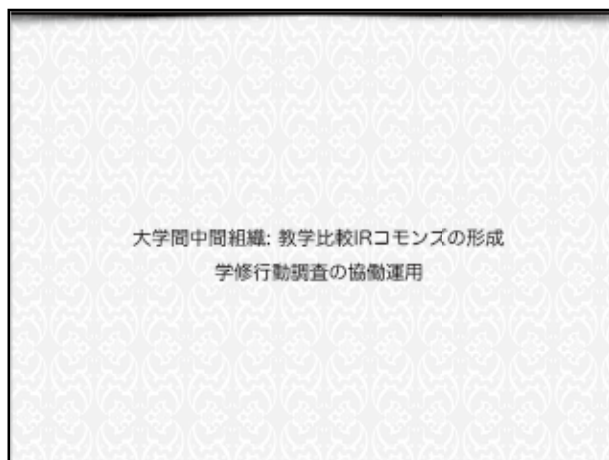
解決

web化により回答負担は顕著に軽減・成果に期待

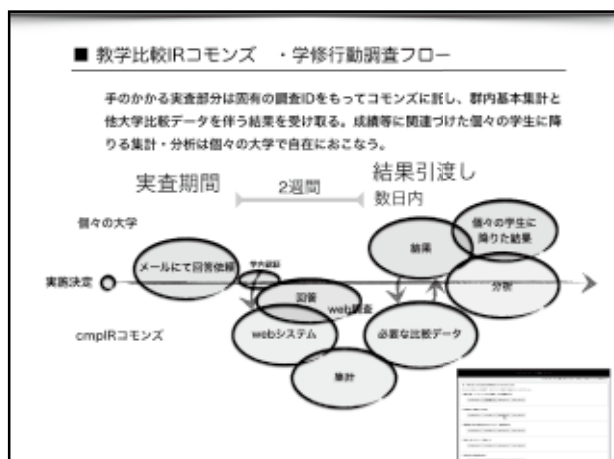
55



56



57



58



1

平成27年10月28日(水)
名城大学第17回FDフォーラム

WEBを用いた理工学教育・学生指導 等支援システムの構築

社会基盤デザイン工学科
准教授 新井宗之

2

説明内容

1. 背景・目的
2. システム構成の概念
3. 機能の概要
4. 経緯・運用状況
5. 今後の課題等

3

1. (1) 背景

(1) JABEE等への証拠資料整備など事務的な作業が増大する中で、その負担を軽減し、また教育・指導のための情報の共有化等により、学生への教育・指導の時間確保、効率化が求められている。

(2) 運用しているWEBシステムを他学科でも使用可能にするため、再構築が必要とされた。

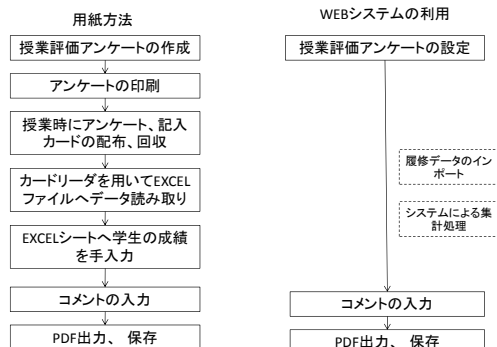
4

1. (2) 目的

- (1) 授業評価アンケートの実施、集計、PDF出力
 - (2) 学生データの共有化による学生指導の効率化
 - (3) 学生への履修支援
 - (4) 授業支援: レポート提出・受取の効率化
 - (5) 学生の要望・意見収集の効率化
- 等をWEBシステムで支援することを目的とする。

5

授業評価アンケートの事例

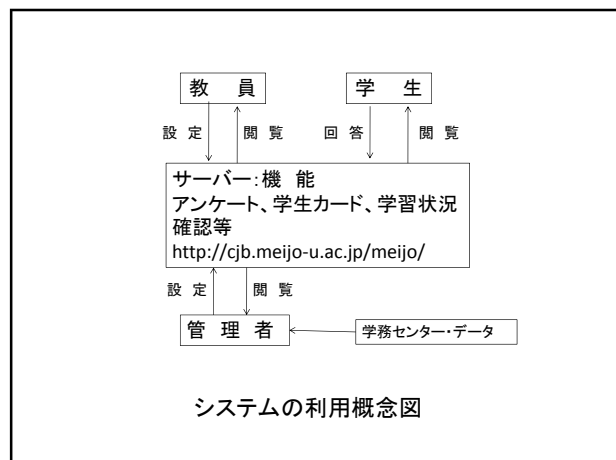


6

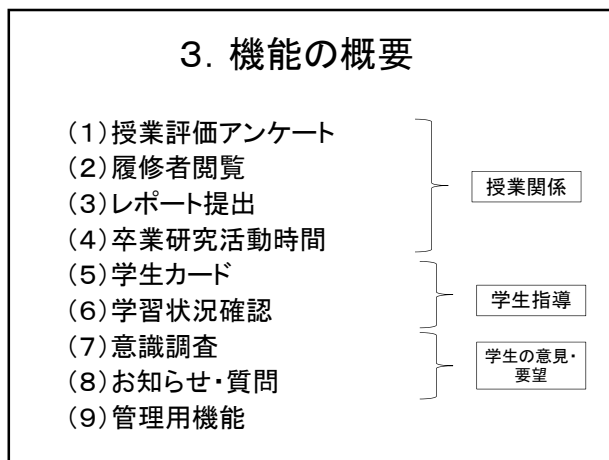
2. システム構成の概念

- ・ システムの利用は、教員、学生、管理者の権限に分かれている
- ・ 利用者IDによりサーバー側で権限による利用形態を切り替えている
- ・ それぞれの権限で入力・出力が処理される

7



8



9



10



11

3. (1) 授業評価アンケート

- ・学生による授業評価アンケートのための機能である。学生の授業への取り組みや、教員の授業方法の評価、教員への意見・要望、成績との関連を総合的に取り扱う機能である。アンケート集計結果はリアルタイムで学生、教員双方で閲覧できる。
- ・1科目1ファイル(PDF)のJABEE証拠資料として出力できる。

12



13

3. (2) 履修閲覧

- 担当している授業科目の履修者を閲覧できる
- 学生カードとリンクし個々の学生の履修状況を確認できる

14

MEIJO UNIVERSITY

履修一覧

No.	学号	氏名	履修科目	履修状況	履修回数	履修単位
1	00001	山田太郎	経済学入門	履修中	1	1
2	00002	山田太郎	経済学入門	履修中	1	1
3	00003	山田太郎	経済学入門	履修中	1	1
4	00004	山田太郎	経済学入門	履修中	1	1
5	00005	山田太郎	経済学入門	履修中	1	1

15

3. (3) レポート提出

- MSWord、Excel、PDFで作成したレポートをWEB上で受け取る機能である
- 再提出等の指示ができる

16

MEIJO UNIVERSITY

レポート提出

No.	学号	氏名	履修科目	履修状況	レポート提出
1	00001	山田太郎	経済学入門	履修中	提出済
2	00002	山田太郎	経済学入門	履修中	提出済
3	00003	山田太郎	経済学入門	履修中	提出済
4	00004	山田太郎	経済学入門	履修中	提出済
5	00005	山田太郎	経済学入門	履修中	提出済

17

3. (4) 卒業研究活動時間

- 「卒業研究活動時間」を学生の入力記録からPDFファイルとして作成・出力する機能である。学生は1日単位で、卒業研究のいくつかの項目についてWEB上から入力する。
- 累計時間等をシステム側で自動集計するため、卒業に必要な残りの活動時間等を学生自身が確認できる。
- (JABEEの基準が変更されたため一部の学生のみ)

18

MEIJO UNIVERSITY

卒業研究活動時間

No.	学号	氏名	卒業研究活動時間	卒業研究活動時間	卒業研究活動時間	卒業研究活動時間
1	00001	山田太郎	0.0	0.0	0.0	0.0
2	00002	山田太郎	0.0	0.0	0.0	0.0
3	00003	山田太郎	0.0	0.0	0.0	0.0
4	00004	山田太郎	0.0	0.0	0.0	0.0
5	00005	山田太郎	0.0	0.0	0.0	0.0

19

3. (5) 学生カード

- 学生の住所、父母住所、電話番号、生年月日、出身高校、自覚している長所、短所等の項目の一覧と、教員が学生との面談等による記録を記入する項目の一覧で構成されている
- 学生が履修した科目の成績、単位取得状況を一覧できる
- 学生指導用情報共有機能である
- (学習状況確認機能へリンクしている)

20

21

3. (6) 学習状況確認

- 習得した単位をもとに、どのような科目を習得すれば卒業条件を充足するかをシミュレーションする機能(一部学生のみ)である

22

23

3. (7) 意識調査

- 学生の意見を自由記述形式のアンケートとして収集する機能である

24

3. (8) お知らせ・質問

- 学生の意見・質問をいつでも受け付ける機能である

25

3. (9) 管理用機能

- ・ 管理者用の機能である



26

4. 経緯・運用状況等

(1)開発経緯:

C科:平成20年度～平成22年度

平成20年度:全体設計、アンケート機能開発

平成21年度:アンケート機能の運用・改善、

学生カード等全体の開発、運用、改善

平成22年度:全体的な機能の試験運用、改善等

学部:平成24年度～平成26年度

平成24年度:A科用機能の追加

平成25年度:全学科対応の改修・構築

平成26年度:全体のチェック・保守

(2)運用:

C科:平成22年度よりアンケート等全体を運用中

(3)経費:

(a)文部科学省・教育学習方法等改善支援経費補助採択

平成20年度～平成22年度、総額4,000万円

(b)名城大学・教育の質保証プロジェクト

平成24年度～平成26年度、総額615万円

(c)MS-26

平成27年度、500万円

21

5. 今後の課題等

(1) WEBシステムの維持管理体制及び経費

(2) システムのセキュリティ強化

(3) 教育課程変更等のシステムへの反映

1

2019FDフォーラム

アウトカム基盤型教育の実現をサポート するIR実践のための基盤システムの構築

名城大学薬学部
大津史子

2

2019FDフォーラム

本取組の背景:学部現状・課題1 アウトカム基盤型教育の導入 Outcome-Based Education



薬剤師に求められる資質 **薬剤師としての心構え**

患者・生活者本位の視点
コミュニケーション能力
チーム医療への参画
基礎的な科学力

薬物療法における実践的能力
教育能力
自己研鑽
研究能力

6年制薬学教育 地域の保健・医療における実践的能力



3

2019FDフォーラム

アウトカムの評価

薬剤師に求められる資質 **薬剤師としての心構え**

患者・生活者本位の視点
コミュニケーション能力
チーム医療への参画
基礎的な科学力

薬物療法における実践的能力
教育能力
自己研鑽
研究能力

6年制薬学教育 地域の保健・医療

資質が身についたかを
確認するためには、各
マイルストーンでの振り返りや評価が必要

本当にこの資質を
身につけたの？



基準となる点

4

2019FDフォーラム

本取組の背景:学部現状・課題2



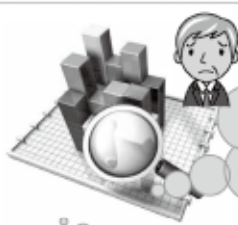
・履修系統図やシラバスが
利用されていない
・自分の立ち位置の確認が
できていない
→日常的に利用できる
仕組み、自分の学びの
蓄積や可視化が必要
→学習状況の把握

・暗記ではなく、理解
し、考える力をつける
ための教育改善
→問題点の把握と改善
計画が必要→教学IR

5

2019FDフォーラム

本取組の背景:学部現状・課題3

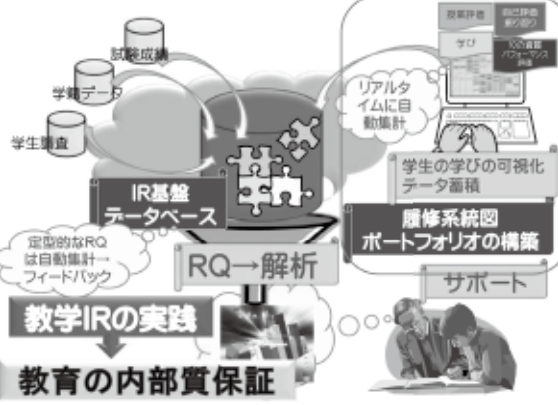


・授業改善アンケートの
結果は、個人フィード
バックのみで、実質的な
教育改善には、つなが
っていない。一問題点の把握と改善計画が必要→教学IR

・データが散在
・データ化されていない
→データ集約のしくみ、発生源
での蓄積、IRの基盤が必要

6

2019FDフォーラム



IR基盤データベース

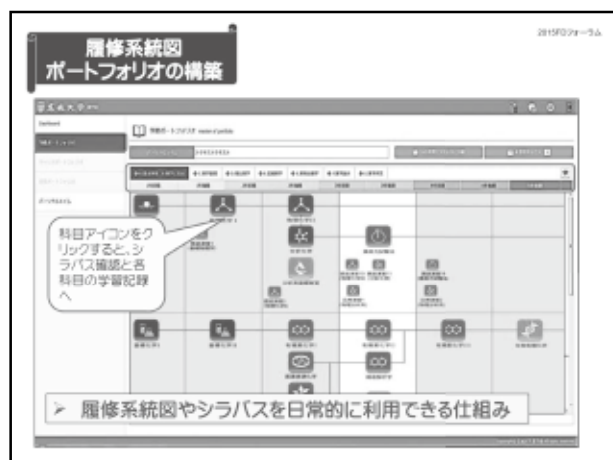
RQ→解析

教学IRの実践

教育の内部質保証

サポート

7



8



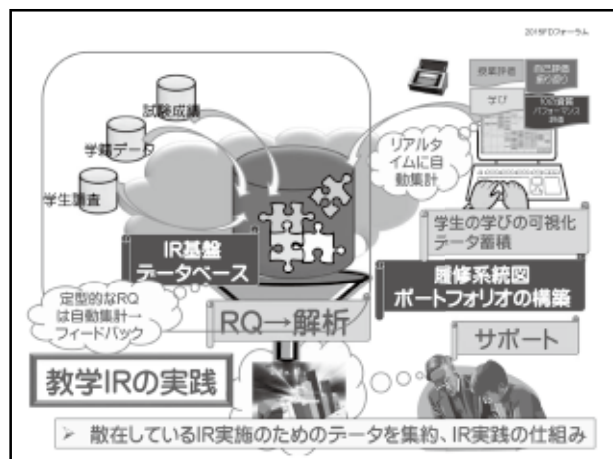
9



10



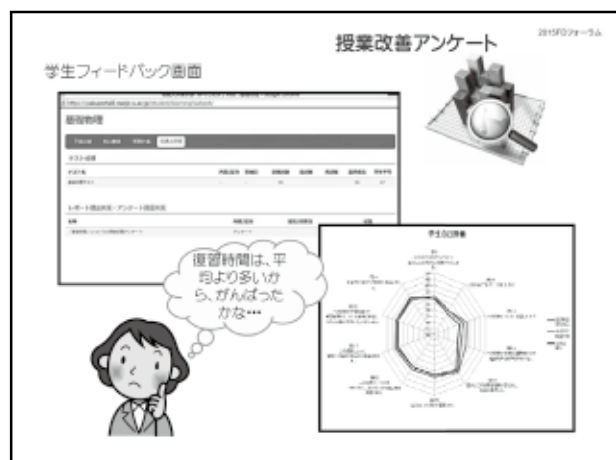
11



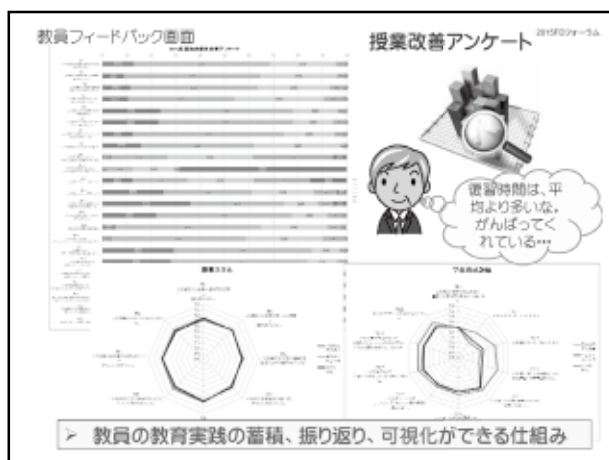
12



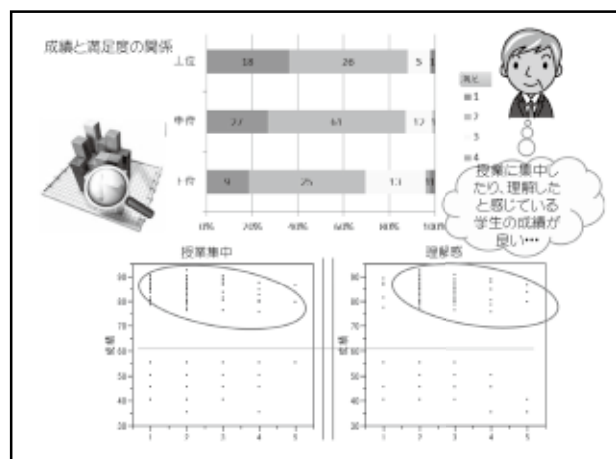
13



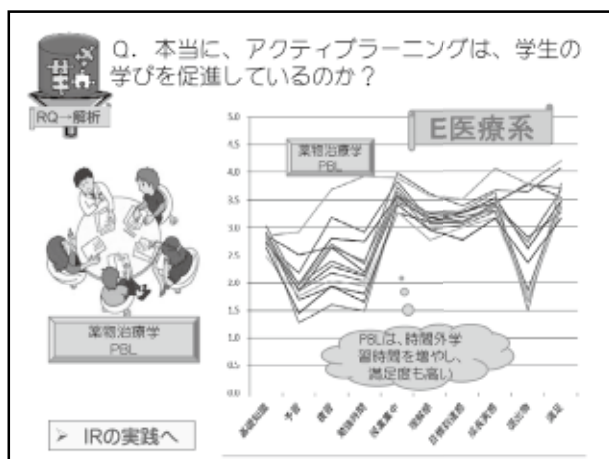
14



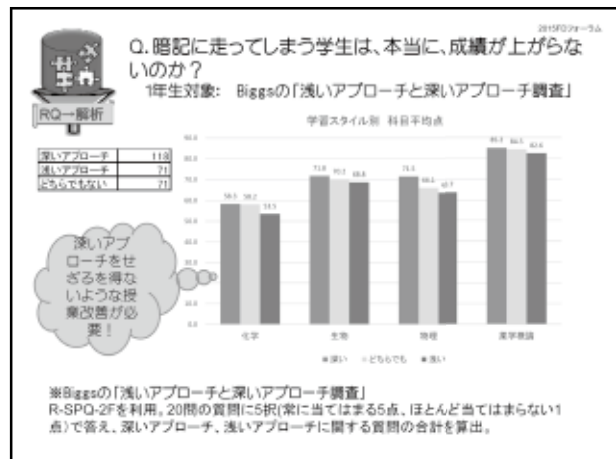
15



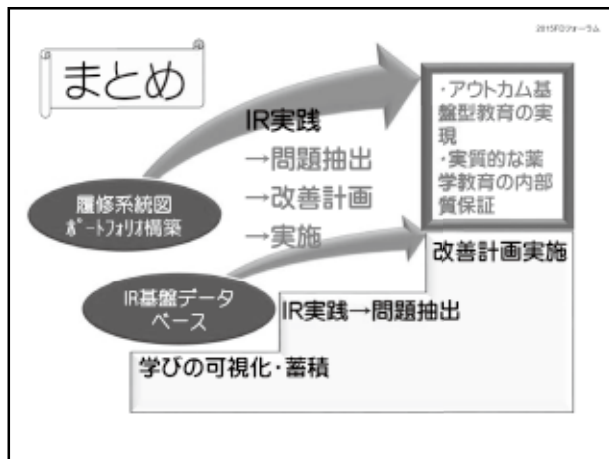
16



17



18





教育功労賞表彰報告

FD 委員会では、平成27年度教育功労賞の募集を行いました。

教育功労賞制度とは、職員の教育改善に対する意識を高め、組織の活性化を図り、本学の教育の質の向上に資することを目的として、各学部及び研究科等において、教育活動及び教育改善に大きく貢献した専任教員またはグループ（事務職員を含む）を表彰するものです。

今年度は下記 3 件を教育功労賞表彰者としました。

氏名及び教育取組のテーマは下記のとおりです。

記

No.	候補者名	所属学部等	単独・グループ	推薦対象となった活動・テーマ
1	森川 章	経営学部	単独	経営学部の教育改善を可能とした先駆的貢献
2	柳沢 きわむ 究	理工学部	単独	建築学科におけるアクティブラーニングの積極的導入による教育の質向上
3	ぐう 葛 はんびん 漢彬	理工学研究科	単独	大学院の教育活動および教育改善における貢献

(No.1の取組を特別教育功労賞として選定)

以上

教育功労賞候補者推薦書

名城大学 FD 委員会委員長 殿

学部・研究科・センター等 経営学部

下記の教育職員（グループ）を「教育功労賞要項」に基づき、教育功労賞候補者として推薦します。

教育功労賞候補者

所属学部等	経営学部	候補者氏名	森川 章
取組タイトル	経営学部の教育改善を可能とした先駆的貢献		

1. 推薦理由（教育活動及び教育改善の取組概要、教育実績、学生指導、学部・研究科等への貢献等）

森川章教授は、1980年4月名城大学商学部商学科に専任講師として着任され、2016年3月末をもって定年退職されます。36年の長きにわたって、商学部および現経営学部において研究教育に貢献されました。そしてこの間、研究教育活動のほか、経営学部協議員・学部長・研究科長、名城大学副学長（常任理事）の要職を歴任され、学部運営・大学運営の面でも大きく貢献されました。

森川先生は、アメリカ巨大企業に関して、米国鉄道会社における予算制度の研究を出発として、近年では、デュポン社の人事労務管理・労使関係に関する史的研究へと発展させて、その一方では、愛知県を中心とした産業集積へと研究領域を拡大されてきました。こうした研究過程の中で蓄積されてこられた森川先生の見識・学識や先生が先駆者として築いてこられた産業界との人的・信頼関係は、経営学部・経営学研究科の大きな財産となり、現在、研究教育を支える不可欠な基礎となっています。

現在、経営学部では、産学連携にもとづく新たな教育・学びスタイルによる教育改善（「FD」）・人材育成の取り組みをおこなっています。こうした取り組みの出発点となったものが、森川先生が学部長時代、平成22年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」に採択された経営学部の「現場触発型教育・学習による就業力の育成」です。この取り組みは、森川先生のリーダーシップのもとで企画され、先生が先駆者として築いてこられた愛知中小企業家同友会などの産業界との人的・信頼関係があって初めて具体化・実行できるものでした。経営学部の産学連携に基づく取り組みは、当初、企業訪問調査から出発しましたが、現在ではフューチャースキルズプロジェクト（FSP）や新たな教育プログラム開発へと発展しています。こうした発展は、産業界による一層の協力が必要となり、したがって他面では、大学の一層の社会貢献が必要となってきます。森川先生は、名城大学卒業生の組織である経友同窓会会員に対して、森川先生が主たる幹事役と

なって「経営・経済セミナー」が定期的開催されるなど、この分野でも先駆者的に生涯教育の実践によって社会貢献をされてこられました。

経営学部教育改善は、まだ途上にありますが、就職率等でその効果が認められるとすれば、森川先生が耕した土地で芽が出始めたことが推察されます。

2. 取組の発展性について（今回の取組の中で、全学的な波及効果が期待できる事項）

現在、「MS-26」において「学びのコミュニティー」構想が示されています。そしてこの構想は、「学生の多様な学び」や「生涯教育の場としての大学」他によって具体化されようとしています。こうした取り組みのうち、産学連携を必要とするものについては、取り組みに実効性がともなうためには、その環境整備が必要となります。それは、常日頃の産業界との交流を通じた取り組みに対する理解であったり、信頼関係の形成であったり、一層の社会貢献という環境整備でしょう。本学は、愛知中小企業家同友会と全学的な産学地域連携基本協定を締結しましたが、これは森川先生らが中心となって関係を深めてきた結果です。仮に、日常の交流がないところで連携協定を締結しても、その実効性に多くを期待することは難しいでしょう。森川先生が先駆者的におこなってきた活動を担う全学的な組織を早期に設置することによって、「学びのコミュニティー」構想の実効性を高めることが期待されることです。

3. その他教育活動に係る特記事項

特になし。

教育功労賞候補者推薦書

名城大学 FD 委員会委員長 殿

学部・研究科・センター等 理工学部 加鳥 裕明

下記の教育職員（グループ）を「教育功労賞要項」に基づき、教育功労賞候補者として推薦します。

教育功労賞候補者

所属学部等	理工学部	候補者氏名	柳沢 究
取組タイトル	建築学科におけるアクティブラーニングの積極的導入による教育の質向上		

1. 推薦理由（教育活動及び教育改善の取組概要、教育実績、学生指導、学部・研究科等への貢献等）

2014年度から2015年度にかけて、候補者は主として下記3点の教育活動を主導的に企画・実施することで、建築学科におけるアクティブラーニングの積極的導入を行い、教育の質の向上に貢献をしました。

①「あじまの家」改修プロジェクト

名古屋市北区にある築約80年の木造民家のリノベーションを実践的な建築教育の機会と位置付け、大工の指導のもと調査・計画から工事までを学生たちの手で行いました。2013年7月から柳沢研究室にて実測調査および改修計画の立案・実施設計を行い、2014年5月から解体工事に着手。研究室内外の約30人の学生たちが10カ月かけて取り組み、2015年3月に完成。地域に残る建築を自分たちの手でつくるという責任感と臨場感のもと具体的なものづくりに継続的に関わることで、高い学習意欲の向上や木造建築の設計・構造・施工への理解の深まり等、通常の授業にはない学生の顕著な成長が見られました。

②加子母木匠塾への参加

「加子母木匠塾」とは、平成7年より岐阜県中津川市加子母にて毎年実施されているサマースクールで、全国の大学から約250人の学生が参加し木造建築実習に取り組みます。名城大学は2013年から参加しています。毎年学生たちが決めたテーマに基づき、公共の建物や遊具・バス停・公園のベンチなどの設計から木取りや積算・実物の製作までを、地元の工務店の指導のもと地域と一体となって行います。夏季の2週間には加子母で泊まり込み、山村での暮らしを体感しながら製作を行うことで、森林見学や間伐体験など、大学では習得する機会のない日本の伝統的木造建築の背景を体感するプログラムとなっています。

③有松の歴史的町家の大学・地域連携の拠点としての活用

名古屋市緑区有松に残る伝統的町家の大学の地域貢献の拠点としての活用試行を軸として、地域社会と密着した実践的な教育・研究を、学部学科を横断しながら実現するプログラムを、建築学科の異なる分野の複数研究室により、2015年度から実施しています。様々な活用の取り組みを行なっています。2014年度には旧東海道に面して景観に調和する塀を学生たちが設計・施工し、2015年度は無印良品とコラボレーションした有松絞ワークショップの実施や、実際の町家を想定した耐震補強方法の研究、歴史的建築をアートイベントの場として活用する試みが実施されました。顔が見える地域社会からの要望に基づく具体的な課題設定、現代社会における問題解決に繋がる取り組み（社会実験）の実践、体的な建築・まちを基点とした臨場感のあるインタージャンルな取り組みといった点が魅力となり、プログラムを通じて学生の学習意欲の向上や歴史的建築の構造・そこでの生活、それを取りまく社会的情勢の理解の深まりなどが見られています。また中日新聞に取り組みが紹介されるなど、社会的にも注目されています。

2. 取組の発展性について（今回の取組の中で、全学的な波及効果が期待できる事項）

上記③の「有松の歴史的町家の大学・地域連携の拠点としての活用」は、MS-26推進事業において「地域大学連携による歴史的建築の活用実践教育プログラム開発」として取り組まれており、2016年度には、理工学部・建築学科にとどまらず、都市情報学部、農学部の研究室も参画した全学的な取り組みへと成長しつつあります。

また、地域に残る歴史的建築を、大学が学部学科を横断した実践的教育・研究および地域貢献の拠点として活用することを軸に、歴史的街並みの維持保全に取り組む行政（名古屋市歴史まちづくり推進室）、町の活性化に取り組む地域（コンソーシアム有松鳴海絞、有松まちづくりの会）、地域ブランド振興を企図する企業（無印良品、有松絞の製造・販売企業）、との連携が現在まさに形成されつつあります。このような地域社会と企業や行政・大学との「学びのコミュニティ」の創出が、同時に大学による有意義な社会・地域貢献ともなります。

3. その他教育活動に係る特記事項

特になし。

教育功労賞候補者推薦書

名城大学 FD 委員会委員長 殿

学部・研究科・センター等 理工学研究科長 加鳥 裕明

下記の教育職員（グループ）を「教育功労賞要項」に基づき、教育功労賞候補者として推薦します。

教育功労賞候補者

所属学部等	理工学研究科	候補者氏名	葛 漢彬
取組タイトル	大学院の教育活動および教育改善における貢献		

1. 推薦理由（教育活動及び教育改善の取組概要、教育実績、学生指導、学部・研究科等への貢献等）

理工学研究科建設システム工学専攻／社会環境デザイン工学専攻の葛 漢彬教授を、次のように大学院の教育活動および教育改善において大きく貢献されたことにより、教育功労賞候補者に推薦いたします。

葛 教授は学生指導の面における業績が顕著であります。平成27年度に、同教授が指導した修士課程2年生の加藤弘務君が土木学会全国大会（平成27年9月16日～18日、岡山大学）において「芯材に波形鋼帯板を適用した BRB（RP-BRB）の解析的検討」を発表し、優秀講演賞を受賞しました。今回の土木学会全国大会の受賞は、同教授が指導した院生の5回目の受賞となります。平成26年度に博士課程3年生が1名^{*}、平成25年度に修士課程1年生が1名^{*}、平成24年度に博士課程1年次が1名^{*}と修士課程1年生が1名^{*}の2名が同賞を受賞しています。このように、平成24～27年度の4年間に連続して5名の院生が受賞し、土木学会構造・耐震分野において高く評価されています。これに加え、指導した院生らが国際学会でも4回受賞されており、国際的にも高い評価を得ています。

葛 教授は、平成20年度に本学に赴任して以来、博士課程学生2名、修士課程学生17名を指導してきています。同教授は一貫して、学生に対し熱意の溢れたきめ細やかな指導を実践し、学生に多くの発表経験を体感させ、積極性、自主性そして自信を育む大学院教育を実施してきました。

以上の諸点から、葛 漢彬教授は大学院教育において極めて顕著な功績があったと認められ、教育功労賞に相応しい候補者として推薦する次第であります。

（※注 一部、学生の氏名が記述されているため、省略をしました。）

2. 取組の発展性について（今回の取組の中で、全学的な波及効果が期待できる事項）

特になし。

3. その他教育活動に係る特記事項

葛 教授は、学部教育においても大きな業績が認められます。平成21年4月に教材として「材料力学」、「構造力学1」、「構造力学2」、「構造解析学」および「耐震工学」の5冊を主要な著者として出版しています。平成25年4月に「力学基礎」を単独で出版しています。教育改善に合わせて、これらの教材を継続的に改定し、現在に至って第3版となっております。

第1回 FD 学習会実施報告

平成27年12月18日（金）、天白キャンパスタワー75 15階レセプションホールにおいて、第1回 FD 学習会を開催した。今回の FD 学習会は、能動的な学習方法として注目されるアクティブ・ラーニングについて、参加者が実践を交えて学ぶことを目的として、FD 委員会と能動的学修促進プロジェクトの共催により、講師に静岡大学准教授 益川 弘如 氏を迎え、「アクティブ・ラーニングの意義と実践」をテーマに、実施した。

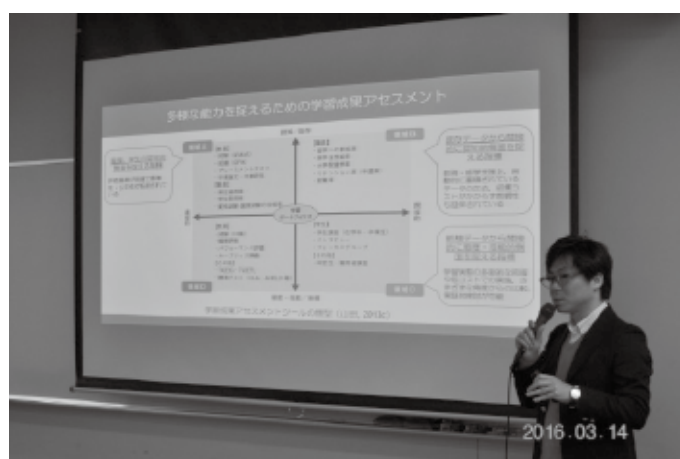


講演では、アクティブ・ラーニングの基礎知識や意義の紹介がされるとともに、手法の一つである「知識構成型ジグソー法」を実践するワークショップを通じ、アクティブ・ラーニングについての理解を深め、実施後の参加者アンケートからは、「アクティブ・ラーニングの実践的な内容・体験を通じて学修効果が高まることを実感できた」、「学生が主体的に学ぶ為のアクティブ・ラーニングの有用性を改めて理解できた」といった意見があった。

最後に、野口 FD 委員会委員長（副学長）から、今回の企画を参考に、「各学部・研究科におけるアクティブ・ラーニングの一層の推進に繋げていただきたい」との纏めをもって閉会した。

第2回 FD 学習会実施報告

平成28年3月14日（月）、天白キャンパスタワー75 1002会議室において、第2回 FD 学習会を開催した。今回の FD 学習会は、今年度 FD 委員会で重点課題として取り組んできた、学習成果の可視化について、参加者が学ぶことを目的として、FD 委員会主催により、講師に京都大学 准教授 山田剛史 氏を迎え、「学習成果アセスメントに基づく組織的な教育改善をどのように進めるか」をテーマに、実施しました。



講演では、学習成果アセスメントのステップとして、アセスメントツールの開発やその分析方法、結果の活用方法について、ご自身の経験やデータを基に、説得力のある解説を展開されました。実施後の参加者アンケートからは、「アンケートなどの評価結果を内部で取り扱うだけでなく、分析結果を含めて学生にフィードバックする重要性について理解できた」、「ループリック、ポートフォリオの具体的な方法と活用について学んだ」といった意見がありました。

6. 資 料

F D 委 員 会 要 項

（目的及び設置）

第1条 名城大学学則第24条の2及び名城大学大学院学則第19条の2の規定に基づき、教育の質の向上に向けた全学を対象としたファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という。）の活動の実施及び各学部等のFD活動を支援するため、FD委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（任務）

第2条 委員会は、次の事項について検討及び実施する。

- (1) 本学の教育内容及び教育環境の改善に関する事項
 - ア 単位制度の機能化に関する事項
 - イ FDの啓発活動に関する事項
- (2) 教員の教育力向上に関する事項
 - ア 授業改善アンケートの企画及び実施、結果の集計・分析・公表、並びにこれらに係る各学部等の取組の支援に関する事項
 - イ 授業改善の取組に関する事項
 - ウ 教育上の功労に対する褒賞に関する事項
- (3) その他委員会が必要とする事項

（組織）

第3条 委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 副学長のうち1名
- (2) 大学教育開発センター長
- (3) 学務センター長のうち1名
- (4) 各学部から選出された教育職員1名
- (5) 各独立研究科から選出された教育職員1名
- (6) 教職センターから選出された教育職員1名
- (7) 大学教育開発センター事務部長
- (8) 学務センター事務部長のうち1名
- (9) キャリアセンター事務部長
- (10) その他委員長が必要と認めた者

（委員長及び副委員長）

第4条 委員会に、委員長及び副委員長を置く。

- ② 委員長は、副学長を充てる。
- ③ 副委員長は、大学教育開発センター長を充てる。

(任期)

第5条 第3条第4号から第6号まで及び第10号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

② 委員が欠けた場合の補充委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会議)

第6条 委員会は、委員長がこれを招集し、その議長となる。

② 委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を代行する。

③ 委員会は、委員の過半数の委員の出席により成立する。

④ 委員会の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数の場合は、議長がこれを決する。

(委員以外の出席)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者の出席を求め、意見又は説明を聴くことができる。

(小委員会の設置)

第8条 委員会は、必要に応じて小委員会等を置くことができる。

(事務)

第9条 委員会の事務は、大学教育開発センターで分掌する。

附 則

この要項は、平成25年4月1日から施行する。

平成27年度 所属別 FD 活動参加状況

所属		所属人数 (※1)	H27前期授業改善 アンケート	H27後期授業改善 アンケート	FD フォーラム	教育功 労賞 (※2)	教育年報		学外セミナー・ 研究集会等 への派遣
							実践報告寄稿 (※3)	教育功労賞受賞者 による特別寄稿 (※3)	
教 員	学長・副学長	5	4	4	3	0	0	0	0
	法学部	法学科	21	19	15	1	0	0	0
		応用実務法学科	17	15	15	1	0	0	0
		計	38	34	30	2	0	0	0
	経営学部	経営学科	20	18	18	0	1	0	0
		国際経営学科	14	13	14	0	0	0	0
		計	34	31	32	0	1	0	0
	経済学部	経済学科	20	13	14	4	0	0	0
		産業社会学科	12	10	9	4	0	0	0
		計	32	23	23	8	0	0	0
	理工学部	理工学部	6	0	0	0	0	0	0
		数学科	19	17	19	1	0	0	4
		情報工学科	19	16	16	1	0	0	5
		電気電子工学科	15	12	13	0	0	0	0
		材料機能工学科	11	9	9	0	0	0	0
		応用化学科	10	8	10	0	0	0	10
		機械工学科	15	14	14	4	0	0	0
		交通機械工学科	15	12	11	1	0	0	0
		メカトロニクス工学科	12	8	9	0	0	0	0
		社会基盤デザイン工学科	13	10	10	1	1	0	0
		環境創造学科	13	12	9	0	0	1	0
		建築学科	15	12	11	0	1	0	0
		教養教育	16	13	13	1	0	0	0
		計	179	143	144	9	2	1	19
	農学部	農学部	6	1	1	0	0	0	0
		生物資源学科	14	10	9	4	0	0	0
		応用生物化学科	13	12	12	2	0	0	0
		生物環境科学科	13	10	12	2	0	0	0
		教養教育等	2	1	1	0	0	0	0
		附属農場	4	0	0	0	0	0	0
		計	52	34	35	8	0	0	0
	薬学部	薬学科	72	28	31	14	0	0	3
		総合基礎部門	1	0	0	0	0	0	0
		ラジオアイソトープ実験施設	1	0	0	0	0	0	0
		分析センター	1	0	0	0	0	0	0
		計	75	28	31	14	0	0	3
	都市情報学部	都市情報学科	27	22	23	0	0	0	1
	人間学部	人間学科	20	17	18	3	0	0	0
	大学院理工学研究科		0	0	0	0	0	0	0
	大学院法務研究科		16	1	0	0	0	0	0
	総合学術研究科		0	0	0	0	0	0	0
	大学院大学・学校づくり研究科		3	2	1	1	0	0	0
	教職センター		7	6	7	1	0	0	0
	情報センター		0	0	0	0	0	0	0
	総合研究所		1	1	1	0	0	0	0
	新学部開設準備室		3	2	2	0	0	0	0
	小計	492	348	351	49	3	1	22	3
職 員	監査室	2	0	0	1	0	0	0	0
	秘書室	4	0	0	1	0	0	0	0
	経営本部	22	0	0	0	0	0	0	0
	MS-26推進室	1	0	0	0	0	0	0	0
	新学部開設準備室	3	0	0	1	0	0	0	0
	新キャンパス開設準備室	2	0	0	0	0	0	0	0
	総合政策部	5	0	0	3	0	0	0	0
	総務部	17	0	0	0	0	0	0	0
	渉外部	10	0	0	0	0	0	0	0
	財政部	16	0	0	2	0	0	0	0
	施設部	13	0	0	0	0	0	0	0
	入学センター	14	0	0	0	0	0	0	0
	学務センター	36	0	0	4	0	0	0	3
	保健センター	11	0	0	0	0	0	0	0
	教職センター	5	0	0	0	0	0	0	0
	大学教育開発センター	7	0	0	5	0	0	0	14
	学術研究支援センター	18	0	0	0	0	0	0	0
	キャリアセンター	24	0	0	1	0	0	0	1
	国際化推進センター	8	0	0	0	0	0	0	0
	情報センター	6	0	0	1	0	0	0	0
	附属図書館	9	0	0	0	0	0	0	0
	法学部	7	0	0	0	0	0	0	0
	経営学部	6	0	0	0	0	0	0	0
	経済学部	7	0	0	0	0	0	0	0
	理工学部	24	0	0	2	0	0	0	0
	農学部	19	0	0	0	0	0	0	1
	薬学部	12	0	0	1	0	0	0	0
	都市情報学部	9	0	0	0	0	0	0	0
	人間学部	5	0	0	2	0	0	0	0
	附属高校	13	0	0	0	0	0	0	0
	小計	335	0	0	24	0	0	0	19
	計	827	348	351	73	3	1	22	22

- ※1 平成27年4月1日現在。
 (教員：助手を含む。終身教授、特任教授(1・2・3号)は含まない。／事務職員：契約職員を含む。派遣職員は含まない。)
- ※2 延べ人数。グループでの申請の場合は構成員もそれぞれ1とカウントする。
- ※3 延べ人数。共同執筆者もそれぞれ1とカウントする。なお、所属は受賞当時のものとする。

7. おわりに

あ と が き

—平成27年度 FD 委員会における活動—

FD 委員会副委員長

安藤 喜代美

近年、教育の改善、質の向上を目指す一環として、「IR」(Institutional Research)ということばをよく耳にするようになってきました。IR は一般的に、教育における調査データの収集分析、報告などの活動として捉えられていますが、広義には大学運営に関連する業務まで幅広い見地での活動として捉えられているようです。こうした動きの中で、本学 FD 委員会では、IR 活動の一つとされている「学修行動調査」の実施を検討すべく、月 1 回の FD 委員会の折に、勉強会を重ねてきました。まず第 1 回目には委員長が「学修行動調査が重要視されるようになった背景の確認と学修行動調査とは何かの解明」という基本的事項から出発しました。そこで指摘されたのは、調査はあくまでもデータ収集であり、教育改善手法につながるわけではないという、調査することが目的ではないということでした。第 2 回では、「学生の学修行動に関する間接評価」というテーマで行なったが、アンケート調査だけでは十分ではなく、成績評価を中心とする「直接評価」と学習行動・学修時間・能力の自己評価・授業満足度等の「間接評価」をリンクさせることによって、その結果を教育の内部質保証のエビデンスとしてや、教育力のアップに利用することができるとする結論に至りました。このような勉強会を 6 回ほど重ね、さらに外部の講師を招いての FD フォーラム、2 回の FD 学習会を通して、教育の改善、質の向上について考えて来ました。

文部科学省の方針ではすでに「学修行動調査」は推奨され、様々な大学で導入も進められており、本学が調査を進めるに当たり勉強会でも意見が出されましたが、昨今、学生を対象とする調査が頻繁に実施され、質問項目等に重複する部分もあるため、調査の一本化の必要性を考えるべきであり、それがまさに、「IR」データの集約と目的を考える時ではないでしょうか。しかし懸念されるのが、データは収集したがそれが教育改善、質の向上に役立たせることができるかという点にあります。再三言及しているように、調査を実施することが目的となり、データを有益に活用できないということになれば、調査そのものが無益なものとなってしまいます。

FD 活動で留意すべきことは、何かをするということに満足をして、することが目的とならないことだと思います。FD は Faculty Development であるからしても、活動にともない発展・展開していくことが重要なことだと思います。やらされているという受動的 FD から、改善点を見つけ次への行動に結びつける能動的 FD に意識を改善していく必要があると思います。あれやこれやと活動ばかりを並べたてるのではなく、まずは意識改善からもう一度、見直していくことも、FD ではないかと思います。

平成28年3月

発 行：名城大学FD委員会

編 集：名城大学 大学教育開発センター

住 所：〒468-8502
名古屋市天白区塩釜口1-501

電 話：(052)838-2033

FAX：(052)833-5230

